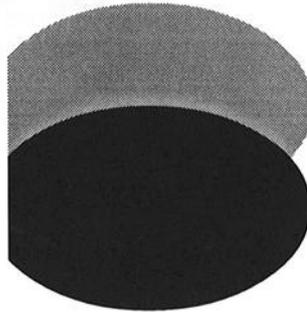


1999826

絵本学会 NEWS No.7

発行：絵本学会
発行日：1999年8月26日
編集：絵本学会事務局・広報委員会
事務局：〒187-8505 東京都小平市小川町1-736
武蔵野美術大学芸術文化学科今井研究室内
TEL：0423-42-6091 FAX：0423-42-5173
<http://vcd.musabi.ac.jp/ehongaku/homepage.html>



絵本学会

絵本学会 1999年度第2回大会
会長就任にあたって
絵本学会 1999年度総会報告
第2回絵本学会大会を終えて
第2回絵本学会大会報告
ワークショップ、研究発表、ラウンドテーブル
シリーズ絵本美術館
会員活動報告
伝言板
インフォメーション 絵本関係展覧会・イベント
事務局からのお知らせ
理事会・運営委員会 記録

絵本学会 1999年度第2回大会

1999年6月19日、20日の両日「もっと自由に、もっと豊かに、こどもとおとなブルーノ・ムナーリへのオマージュ」を全体テーマに富山県大島町絵本館で第2回絵本学会大会が開催されました。大島町絵本館は、前号のニュースでも紹介しましたように町をあげて絵本文化の振興に力を注いでいます。高井進館長のご努力で初めての地方開催を実現させることができました。

開会式では、実行委員長の高井館長が「ブルーノ・ムナーリの世界に浸るとともに、今後の絵本の在り方を考えてもらいたい」、太田大八会長代行が「大会を通して絵本の活性化につなげたい」とあいさつし、吉田力大島町長、花木繁正町議長からも歓迎の言葉が述べられました。第1日目のパネルディスカッションには、263名の参加があり、二日間を通して366名が参加しました。

地方大会、絵本館での大会という特徴が十分引きだされた大会でしたが、絵本学会の設立趣旨、性格を考えると地域に密着した活動の第一歩になったといえるでしょう。

大会はすべて順調に進み、大成功の大会でした。あらためて大会を支えてくださった大島町絵本館と大島町の皆さまに感謝の意を表したいと思います。

なお、第1日目の総会では、吉田新一前会長が1998年度の活動を振り返るとともに、会長を辞される理由について述べられました。任期途中ですが日本女子大学を退職されるのを機にすべての役職を退かれるというのは、会長に就任されたときからの約束でした。絵本学会の活動を今日の軌道に乗せていただいたご努力に心より感謝したいと思います。

総会では、太田大八会長代行が正式に新会長として承認され、吉田理事の後任には、三宅興子理事が承認されました。

絵本学会は、太田会長の元に新たなスタートを切ることになります。

会長就任にあたって

太田大八

吉田先生が急にお辞めになられて不意打ちみたいで会長に指名されてしまいましたけれども御承知の通り、私はもう高齢でございますので任期があとどれくらいか分かりませんが、空席になると困りますものですから、やむをえず今お引き受けして生きている間一生懸命やらさせていただきます。

抱負というものは特にはございませんけれども、絵本学というものは『学』という名前を付けた以上は、やはりきっちりとその『学』として学んでいきたいし、一生懸命やっていきたい。『学』というものはみんな楽しんでやっていくものであって、数学にしる天文学にしる、みんなお学びになっている方々は楽しんでやっているわけですから、楽しんでやるのが一番いいと思います。

絵本学を特にこれから広げていきたい理由というのは、現在の人間を取り巻く我々の周辺の状況とか子供の問題とか、いろんな問題が全部絵本学との関連の中で考えられていけるであろうと思うわけです。

それで、日本の中では絵本に関する活動というのは、さっきも申しましたけれども、フォーラムとか地域の活動とか美術館の活動とかたくさんありますので、そういう方々の力を借りながら、あるいはそういう方々の活動のいろいろなノウハウを情報として吸収し、絵本学会もまた情報を発信して、さっきも申しました通りに日本全体の活動を活性化させようというねらいがある訳です。そういう意味でありますので、どうことができるか分かりませんが、会員の皆様のお知恵を借りながら、我々学会のメンバーの中にもいっぱい優秀な方がおられますので、そういう方々といかに運営していくか、これからいろいろ考えながら、日本の子供の本、あるいは絵本、そういうものを活性化できるように考えております。

及ばずながら次の改選までは、がんばってみようと思っておりますので宜しく御願致します。

絵本学会 1999年度総会報告

【絵本学会 1999年度総会】

絵本学会 1999年度総会は、1999年6月19日大島町絵本館（富山県大島町）で開催されました。1998年度活動報告ならびに1999年度活動計画が報告された後、以下の総会次第にしたがって審議が行われました。

総会の出席者数：53名、委任状提出者数：10名

絵本学会第2回定期総会次第

1. 開会の辞

2. 1998年度活動報告と会長の交代について

3. 役員人事について

吉田新一会長に代わって、太田大八氏が新しく会長に就任することが承認された。任期は2000年度総会まで。あわせて、三宅興子氏が、吉田新一氏に代わって理事・運営委員に就任することが承認された。

4. 1998年度活動報告

●理事会・運営委員会

4月11日 運営委員会

5月10日 理事会および運営委員会

6月6日 運営委員会

7月12日 理事会および運営委員会

9月20日 運営委員会

12月12日 運営委員会

2月13日 運営委員会

3月17日 運営委員会

●大会、総会 1998年6月6日、7日

日本女子大学

●広報

広報紙『絵本学会ニュース』の発行 4月、8月、12月

『会員名簿』の発行 12月

●企画

特別講座の開催「ドゥシャン・カーライによる絵本の創造」7月28・29日（於：武蔵野美術大学）

スロバキアの絵本作家ドゥシャン・カーライ氏を招いてのワークショップと講演

「絵本フォーラム'98 PART2」の開催 9月

「絵本学会【関西圏】の集い」の開催 11月

●出版

絵本学会研究紀要『絵本学』第1号の刊行

機関誌発行の準備 継続検討課題

5. 1998年度会計・会計監査報告

事務局（今井）より1998年度決算報告について説明。

監事（松岡）より監査結果について報告。

原案どうり承認された。

資料：別紙添付

6. 1999年度活動計画

●広報

広報紙『絵本学会ニュース』の発行 4月、8月、12月

●企画

「絵本フォーラム'98」の開催

「絵本制作セミナー」の開催

●出版

絵本学会研究紀要『絵本学』第2号の刊行

機関誌発行の準備 継続検討課題

●分科会活動

地域活動、分科会活動の推進

●2000年度以降絵本学会役員改選のための選挙

7. 1999年度予算案

事務局（今井）より1999年度予算について説明。

原案どうり承認された。

資料：別紙添付

8. 役員選出規則について

昨年、総会で了承された暫定規則について説明があり、正式規則として定めたい旨報告がありました承された。

理事選出規則、監事選出規則、運営委員選出規則

●理事選出規則

1. 理事は、7名のうち5名は正会員の中から運営委員の選挙によって選出される。会長は選出された理事の推薦を得て、さらに2名以内の理事を任命することができる。

2. 選出された理事は、総会の承認を得て決定する。

●監事選出規則

1. 監事は、正会員の中から正会員の選挙によって選出される。

2. 監事候補は、改選の1カ月前までに自薦、推薦によって事務局に届ける。

3. 選挙は、2名を連記し郵送によって行う。

4. 選挙によって選出された監事は、総会の承認を得て決定する。

●運営委員選出規則

1. 運営委員10名は、正会員の中から正会員の選挙によって選出される。会長は選出された理事の推薦を得て、選挙にかかわらずさらに4名以内の運営委員を任命することができる。

2. 運営委員候補は、改選の1カ月前までに自薦、推薦によって事務局に届ける。

3. 選挙は、10名を連記し郵送によって行う。

4. 選挙によって選出された運営委員は、総会の承認を得て決定する。

9. 閉会の辞



開会式

1998年度 決算書

[収入]	項目	予算額	決算額
	会費収入	2,888,000	3,042,000
	法人等会費	260,000	200,000
	個人会費	2,628,000	2,842,000
	利息収入	40,000	810
	貯金利息	40,000	810
	参加費収入	500,000	360,000
	大会参加費	200,000	232,000
	フォーラム参加費	300,000	66,500
	特別講座参加費	—	61,500
	前年度繰越金	1,720,971	1,720,971
	合計	5,148,971	5,123,781

[支出]	項目	予算額	決算額
	運営費支出	350,000	382,000
	総会・大会費	200,000	232,000
	大会運営補助費	150,000	150,000
	活動費支出	500,000	76,009
	専門委員会活動費	500,000	76,009
	企画委員会	100,000	69,736
	広報委員会	100,000	6,273
	旅費・交通費	350,000	344,530
	謝金支出	250,000	320,000
	講師謝礼	150,000	220,000
	論文集編集・制作費	100,000	100,000
	印刷費支出	730,000	411,770
	絵本学会ニュース	240,000	283,810
	研究紀要	250,000	0
	その他	240,000	127,960
	消耗品費支出	100,000	55,311
	通信費支出	520,000	426,350
	絵本学会ニュース発送費	260,000	248,170
	研究論文集発送費	120,000	0
	事務連絡費	140,000	178,130
	報酬支出	350,000	350,000
	事務局報酬	350,000	350,000
	雑費	50,000	3,883
	予備費	100,000	0
	機関誌刊行積立金	1,000,000	1,000,000
	次年度繰越金		1,753,928
	合計	5,148,971	5,123,781

1999年度 予算書

[収入]	項目	予算額
	会費収入	2,848,000
	法人等会費	260,000
	個人会費	2,588,000
	利息収入	20,000
	貯金利息	20,000
	参加費収入	300,000
	大会参加費	200,000
	フォーラム等参加費	100,000
	その他収入(入会金等)	50,000
	前年度繰越金	1,753,928
	合計	4,971,928

[支出]	項目	予算額
	運営費支出	400,000
	総会・大会費	200,000
	大会運営補助費	150,000
	活動費支出	300,000
	専門委員会活動費	300,000
	旅費・交通費	550,000
	謝金支出	300,000
	講師謝礼	200,000
	論文集編集・制作費	100,000
	印刷費支出	750,000
	絵本学会ニュース	300,000
	研究紀要	250,000
	その他	200,000
	消耗品費支出	80,000
	通信費支出	540,000
	絵本学会ニュース発送費	260,000
	研究論文集発送費	120,000
	事務連絡費	160,000
	報酬支出	450,000
	事務局報酬	450,000
	雑費	50,000
	予備費	100,000
	機関誌刊行積立金	1,200,000
	次年度繰越金	301,928
	合計	4,971,928

資産残高明細 1999年3月31日現在
 現金 11,127
 三和銀行国分寺支店 73,401
 たかの台駅前郵便局 2,669,400 内機関誌刊行積立金 1,000,000円

梅雨の真只中、北陸富山の地・大島町で、町あげて開催された大会が無事終了し、漸くホッとしているところです。

最初の地方開催ということで、大いに責任を感じ、肩に力が入ったのですが、準備途中から「地方開催の最初の私どもが余り立派にやり過ぎると後に続く開催地のお方がお困りになるだろう」と勝手な理屈をつけて、職員の皆さんに「楽しみ乍らゆっくり取り掛かりましょう」と言い、「但し、おもてなしの心だけは堅持しよう」ということで取り組んだことでした。

それでも大会という以上昨年の大会程度の参加者を得たいと念じ、地方大会にふさわしいテーマも設け、地元に分かり易い学会とするよう本部にも我儘を言い県内20を超える関係機関の長及び職員の方々に集って頂き協力を要請したことでした。

これら実行委員の方々のお力添えで、予想していた200名を遥かに上回る366名の参加を得ることができました。第1日目は会員71名、招待者21名、非会員171名、計263名、懇親会へは108名が出席されました。第2日目は研究発表へ250名、午後の午後のラウンドテーブルに200名の参加者がありました。

昨日、絵本学会事務局からご丁寧なねぎらいのお手紙を頂戴しましたが、文中に「大会が全て順調に進行し、大成功であった」の文言があり、いささか恐縮しております。私はこうした研究大会の成否は、研究内容もさり乍ら何よりも同学の人々がどれ程深く、広く交流し得たか、にかかっていると思います。その意味で成功へと導いて下さった本部役員や、見えないところで大会を支えて下さった多くのボランティアの方々に感謝するばかりです。皆様本当に有難うございました。

(第2回絵本学会大会 実行委員長、大島町絵本館 館長)



開会式. アトラクション

【パネルディスカッション】6月19日(土) 14:05～15:30

「ブルーノ・ムナーリ」

パネラー 岩崎 清 (こどもの城)

今井良朗 (武蔵野美術大学)

駒形克己 (グラフィックデザイナー)

司会 中川素子 (文教大学)

会場：絵本館シアター

中川 この大会でブルーノ・ムナーリ特集ができるということは、私は絵本学会ができたからこそと考えています。他のどの学会でもブルーノ・ムナーリを上手く取り上げられないのではないかと思います。

先生方の紹介をいたしますが、第1番目にお話くださる方が、岩崎清先生です。岩崎先生は、美術出版社にお勤めになられて、1971年に『円と正方形』というムナーリの本を編集出版されています。現在は、東京青山にあるこどもの城の造形部長をなされていますが、こどもの城は1985年の開館記念に画期的なムナーリ展を開催しています。ですから、ムナーリを語るなら岩崎先生ということで、お呼びした訳なんです。また、岩崎先生は、メキシコにいらっしやいまして、メキシコ文化の造形や薬草のフィールドワーク研究をなさって、そのうち『メキシコ古代医学』という本を出したいというお話です。こどもの城ではメキシコのパバロテこども博物館と一緒に催し物をやったりして、「こどもと造形」を通してということでムナーリの精神とか、ムナーリの行ったワークショップなどについてお話して下さることと思います。

それから2番目にお話して下さるのが今井良朗先生です。今井良朗先生は、絵本学会の事務局長さんをなさっています。みなさんに毎回とても素晴らしい学会ニュースが送られると思いますが、あーいった一切の大変な役割を全部して下さっています。そして武蔵野美術大学の今まではデザインの方でしたが、今年からは芸術文化学科の教授でいらっしやいます。それから武蔵野美術大学には美術資料図書館というのがありまして、そこの副館長さんもなさっていらっしやいます。ここは、私なんかから見ますと「ワッ、宝の山だ」と思いますが、素晴らしい絵本やポスター等の資料がいっぱいあります。今井先生は表現論としてデザイン・印刷・絵本・ポスター等、非常に幅広く研究なさっています。1993年に、武蔵野美術大学美術資料図書館、その後目黒区美術館で開催した『絵本の視線と空間』という画期的な展覧会なども企画なさっています。今回は、ムナーリの絵本に絞ってお話していただきます。

それから駒形克己先生です。グラフィックデザイナーです。1977年に渡米なさりニューヨークのCBS本社などでグラフィックデザインを手掛けてらっしやいました。そして1983年に帰国なさり1986年にデザイン会社ワンストロークを設立なさいました。1981年に偕成社よりリトルアイシリーズ全10巻を出され、その後本当に素晴らしい絵本を次々に出され、とても誠実なお仕事をなさっています。全国の美術大、特にデザインの学生達が駒形さんの大ファンです。

それから今回、こどもの城の有福さんとスタッフの方がワークショップをしてくださいますが、このワークショップをして頂くために駒形さんにも非常にお世話になりました。また、駒形さんはフランス・スイス・ニューカレドニアで『1・2・3駒形展』をなさるなど、外国でも非常に評価の高い作家です。駒形さんは御自身でもワークショップをよくなさってまして、ムナーリの精神を良く引き継いでいる方でいらっしゃると思います。それでは、短い時間ですが密度高くお話しして頂きたいと思います。岩崎先生、よろしく申し上げます。

岩崎 本日は、第2回絵本学会のシンポジウムにお招きいただき、厚く御礼申し上げます。私は、東京の「こどもの城」造形事業部に勤務しておりますが、かつて1985年の開館の記念事業として、ムナーリを招待して、(1)シンポジウム＝「子どもの創造性をいかに引き出し、愛情をもってそれを育ててゆくか」(2)ブルーノ・ムナーリ展(3)造形指導のワークショップの公開指導の三つの行事を実施したことがあります。そのような経緯もあって、ここでムナーリが「こどもと造形」の領域で果たした業績について話をしようになったと推測いたしております。

どのような領域にしる、仕事らしい仕事をしたアーティストを総体として語ることは困難なことです。ブルーノ・ムナーリについても同じことが言えるでしょう。デザイナー、絵本作家、造形教育家、建築家などとして、広大な領域で活動したので、ムナーリの「子どもの造形指導」にかんする話は、その一部分を取り出し、一括りしようすることは、ムナーリという全人格的な存在を切り刻んでしまうことになりかねません。

ムナーリは、亡くなる1998年の一年前の1997年に、ミラノに近いカントゥーという町で、最後の展覧会をしましたが、これはその時のカタログの表紙のデザインですが、上から順にグラフィックデザイナー・作家・建築家・インダストリアルデザイナー・美術家・子どもたちと遊ぶ芸術家を木製の万力で締めてあります。見てお分かりになるように、これらの「領域」を一滴に絞り込もうとするような図柄になっています。このポスターは、ムナーリ自身が語句と原案を示し、スイス在住の葵・フーバーさんというデザイナーがデザインしたものです。ブルーノ・ムナーリ自身、自らをこのように規定しています。ですから、ムナーリの全体像については、次のような事柄に言及しないと把握しにくいと思います。

(1)アーティストとしてのムナーリ

- ・ムナーリの時代背景
- ・イタリア現代美術の時代
- ・ムナーリの根源的な特質＝ユーモア

(2)造形芸術に対するムナーリの考え方

- ・生活における芸術の役割＝大衆と芸術
- ・マルチプル・アートとオリジナルという考え方

(3)造形教育者としてのムナーリと子どもの造形

- ・契機として＝絵本の制作
- ・現代芸術と子どもの表現
- ・ビジュアル・コミュニケーション
- ・ワークショップということ

こうした全仕事を貫いている太い精神が何であるか、探り出すことが、そして私たちがかれから何を学ぶことができるか、それが今日

の私の課題ではないかと考えています。

ムナーリは、未来派のアーティストで仕事を始め、さまざまな領域にわたる業績を積み重ねてゆきますが、その根底には、造形美術は難しいものではなく、人びとの生活を豊かにするものである、と終生言いつづけてきたアーティストと要約できそうです。ですから、今大会が設定したテーマの「もっと豊かにもっと自由に～子どもと大人」は、とてもロマンティックな題ですが、ムナーリが目指したものの、そのものと言えると解釈しています。

しかし、ムナーリのこの全体の仕事を通じて、子どものみならず、すべての人びとの造形教育家としての部分に焦点を絞りながら、うまく行くかどうか覚束ないのですが、私はムナーリの仕事を追跡してみたいと思います。

ではなぜ、私がムナーリに強い関心を抱いているか、その理由は次の点にあります。例えば私たちが今抱いている「子ども感」の領域で言えば、ジャン・ジャック・ルソー「エミール」に描かれている子ども像の啓蒙思想なしには、子どもについて語ることは困難でしょう。また、戦後日本の子どもの造形教育の「自由に描く」という考え方に関しては、19世紀の後半から20世紀の中ごろまで活動したオーストリアの美術教育家フランツ・チゼックの大きな影響を受けていることは否定できません。このように文芸や科学の領域において、ある業績がそれ以前の古い考え方を覆したり、あるいは新しい解釈を提出することはしばしばあり、その業績が後世に大きな影響を及ぼすことがあります。歴史を振り返ると、そうした先駆者たちの業績によって、私たちは人間、あるいは事物について、新しい解釈やものの見方を獲得し、世界を豊かにしてきているのです。このような意味で、ブルーノ・ムナーリは重要であるといえます。つまり、芸術が芸術家のみによって営為される特別なものではなく、「すべての人びとが芸術に感動し、全ての人びとが芸術家である」ことを、芸術家の立場から万人のために芸術の「秘密の花園」の扉を広く開けようとした人であって、このような人物は美術史上希有な存在だと解釈するからです。

さて、ムナーリは、現役のモダンアーティストでありながら、大衆にアートは難しいものではありません。私たちの生活をより自由に、より豊かにしてくれる表現手段です。だから、アートをもっと楽しもう。」と提案しているのです。ムナーリは造形の原理を平易に語り、その考えをさまざまな形式を通じて実行に移しました。マルチプルアートなどを通じて、「アート」をできるだけ易しく多くの人びとに伝えるという啓発活動は、成功はしませんでした。子どもたちを対象にした実践活動は終生続けられました。大人の目を芸術に向かわせるという啓発活動に、資本の厳しい原理や大衆が当時は成熟していないという理由で、成功はしなかったのですが、ムナーリはインタビューに答えて、こう語っています。「大人は成長期にすでに自らの世界観を確立しているので、それを刺激して、柔軟な精神に変換しようということに無理があるという結論に達して、それではまだ社会に汚染されていない、柔らかな子ども時代に、アートの原理を《アート》を通じて」教育しようとした」と。

とりわけ、ブルーノ・ムナーリが果たした重要性は、「アート」が文字以外の伝達手段であることを、人びとに伝えようとしたことなのです。ムナーリのすべての仕事は、アートの「視覚言語」性の確立に集約されるといっても過言ではありません。今から30年以上も前にアメリカの哲学者ポラーニーは『沈黙知の次元』という本の中で、人の顔を描写するのに、言語では非常に困難であるが、デッ



パネルディスカッション「ブルーノ・ムナーリ」：
左から、中川・今井・岩崎・駒形氏

サンや似顔絵によれば、容貌をすぐさま伝えることができると述べ、その推論から、言語以外に私たちは他に別に認知する方法をもっているという哲学的な考察を行っています。しかし、それはすでに小説家たちがそれぞれの作品の中で語っていることです。たとえばサマーセット・モームという英国の小説家は、ポラーニーの指摘よりもすでに30年前に、『人間の本质』という小説の中で、人の容貌や外観をあれこれ描き出そうとする小説家の悩みを次のように書いています。

「私は作中人物の容貌を、自分が見る通りに読者にも髣髴させるように描き出すことのむずかしさを考えたりした。私にはこれはいつになっても小説で一番面倒なことのひとつなのだ。作者がある顔を、眼はこう鼻はこうと丹念に書くとして、それで本当には読者に何が伝わるか。何も伝わりはしないと私は思う。そうかといって一部の作家がよくやる、例えばゆがんだ笑い方とかうさん臭い目つきとか、たとえ効果的だとしても、問題を回避しているだけで解決はしていない」(朱牟田夏雄訳)

このような文学者の鋭い観察眼によっても分かるように、言語によって人を表現することが如何に難しいか述べています。デカルト以来、認識の手段として言語は、重要なものものと思われてきましたが、ポラーニーは、上のような例に見られるように文字による推論や考察が及ばない、そして確実に意味内容を伝えることのできる表現方法、つまり私たちが言語体系以外の認知の方法をもっていることを、革新的に推論しています。そうした経緯のなかで、私たちの「認知力」について今では新しい学問さえも成立する傾向があります。ここでは、言語手段による人の顔や姿形の描写の困難さについて述べましたが、しかし造形美術の領域において、私たちはフォルム(形態)・色彩・バランス(均衡)・ヴォリューム(量塊)・コンポジション(構成)・ムーブメント(運動)などという造形的手段によって、つまり「造形美術」という表現方法は、言語では伝えられない内容を伝達することができるということを、先験的に知っているのです。ブルーノ・ムナーリは、ポラーニーや認知論とは直接かわりはありませんでしたが、ムナーリはポラーニーが提案した内容を「視覚言語」、あるいは「視覚伝達手段」というような言葉で表現しているわけです。アルタミラやラスコーの洞窟に描かれた壁画が語っているように、言語の誕生以前には、伝達は形象で行われていたことが、文化人類学的に考察されています。そして、言語の誕生とともに、つねに曖昧さをともなって表現される形象表現は、言語表現の認知性に比べると包括性に乏しいということで、一段と下位概念に置かれてきました。しかし、ポラーニーが指摘するするように、言語以外の認知力は存在するのであり、それは言語にとっ

て代われるものではないことも明確です。ムナーリは、アートのもつ、この言語以外の表現性の重要性をさまざまな手段によって私たちに伝えようとしたのです。それはまさに、造形美術が、言語以外の表現・伝達手段として内包している「アポリア」なのです。そこから、例えば、言語と比較すると、「美術の曖昧さ」が先に出て、「美術は人間形成に効果がすぐに役に立たない」などという安易な教育論がでてくるのです。しかしすでに指摘したように、ポラーニーの指摘は今では、先端的な認識論として認められてきています。ムナーリは、言語の力で表現が可能でない領域で、視覚言語から前にあげた色彩とかテクスチャー(表面性)とかの原理を取り出して、子どもたちが「遊びながらアートに親しんで行くように」しむけ、それを「ジョカーレ・コン・ラルテ(jocare con l'arte)」というプログラム、つまり「アートであそぼう」というプログラムを作り、それを実践したのです。自らの芸術を豊穣にするために子どもの領分に興味を示し、子どもの造形表現活動に純粋に関心をいだいたアーティストはそれほど多くはいません。現役の芸術家で、ブルーノ・ムナーリのように生活のなかの芸術の重要性を認め、それを大人も子どもも含めて大衆のために普及させようとした、アーティストは稀です。社会の同時代的な問題を提起し、自らが時代の告発するアーティストはたくさんいます。そして、かれらは、芸術を通じて無知蒙昧な大衆を止揚させようとするよりも、惰眠を貪る私たち自身の日常性を攻撃するあまりに、時代の正しき証言者であろうとしすぎ、大衆からアートをより遠ざけて、アートを芸術家のサンクチャリティにしている人が多いのです。ここに、現代に生きる万人のためのアートを目指したアーティストとしてのムナーリを、他のアーティストと明確に画する一線があると、私は考えます。ムナーリは次のような発言をしています。「芸術家は、自分の領域のことばかり考えていてはならない。社会にかかわりを持ち、自らの芸術的な資質を社会のために提供しなければならない。とくに子どもに関心を持ち、近未来の大人である子どもたちの育成に尽くすようしなければならない。それが芸術家の社会的な役割です。」ではアーティストとして人生を歩み始めたブルーノ・ムナーリが、子どもと造形の分野に足を踏み入れることになった、経緯を語りながら、ムナーリの何が取り分け、今注目しなければならないか、その点を探って行きます。ブルーノ・ムナーリの芸術家として肖像については、どなたか詳細に発表なさる報告者がいると思いますが、話の序列として、私はイタリアの評論家アルド・タンキスの著作『ブルーノ・ムナーリ』を参考に、芸術家として略歴について簡単に触れさせていただきます。ブルーノ・ムナーリは、1907年にイタリアのミラノに生まれました。独学で美術を修めて、パッラたちの「第一世代の未来派」に続

く、「第二世代の未来派」に属するアーティストとして、活動を始めました。未来派の残した仕事は、かつてはムッソリーニを愛国的に賛美したパツラたちのこともあり、第二次大戦後、未来派の仕事について評価することが憚られていました。しかし、未来派は仕事の内容から考えれば、優れて先見性があり、資本主義が爛熟し、人びとの生活を歪ませて行くことを予測していました。ムナーリはこの伝統を引き継ぐ「第二世代の未来派」の一人として作家活動を始めます。初期のころの理性的でありながら、その中に存在する究極のユーモアを発掘才能は天賦のものでしょうか。一連の「役に立たない機械」や「軽やかな機械」は、それをみごとに具現化しています。また「機械化 不完全主義 全体芸術 有機的な芸術 公共の危険」という展覧会に捧げられたMAC（具体美術運動）のカタログの第10号には、1938年にムナーリによって起草されたという「機械主義宣言」が掲載されています。それは挑発的であり、ユーモアがあり、機械文明に対抗していかに芸術の力を活用するか、今でも通用する立派な内容の考えを明確に述べています。

大戦直後の復興期のミラノは、抽象芸術のもっとも初期の表現活動や行為の中心でした。そこに参集したのは、多くはスイスの抽象芸術家たちでした。たとえばマックス・フーパー、マックス・ビルなどがおり、かれらはひじょうに才能あるイタリアの芸術家と接触をし、終戦の2年後の1947年に開催された抽象芸術展は、大がかりな組織作り上げた結果として成功しました。クレー、カンティンスキー、アルプ、ローゼ、ハービン、ビルなどの芸術家の作品が、リチーニ、マッソン、ヴェロネージ、ロー、ソットサス・ジュニア、ムナーリなど多くイタリアの芸術家の作品と並べて展示されたのです。翌年の1947年には、短い期間でしたが、イタリアの抽象芸術家の最善を呼び集め、ムナーリは、ソルダティ、ドルフレス、モネットゥなどと「抽象芸術運動」を創設しました。当時のイタリアにおける芸術的な環境と云えば、後期立体派の後ろをのろのろと歩みながら、あるいはまた社会的リアリズムの主題の泥沼の中になっちもさっちも行かないで、身動きが取れないままでした。しかし、戦前に行われていた抽象芸術のいろいろな実験との関連を確立しようとし、合理的な文明という術語において「芸術の統合」という概念を復活させるためにひとつの試みが行われました。この運動は建築、インダストリアル・デザイン、視覚芸術を調和させようとする試みでした。そしてムナーリは、これらの事件では重要な役割を担い、10年間という歳月にわたって運営しつづけましたが、意義ある結果を生み出すには失敗してしまいました。こうした純粋美術家としての仕事から、ムナーリが子どもの領分の仕事と出会い、それ以降積極的に子どもの造形教育の分野に参入するきっかけになったのは、戦後、5歳になる息子のアルベルトに「絵本」を買って上げようとしたのですが、本屋にはよい絵本がなく、ムナーリ自身が絵本の制作に手をつけることになった経緯は、よく知られていることです。それは、1945年から出版されることになる「モンダドーリ社」が発行する絵本シリーズに帰着してゆきます。

このようなさまざまな活動の沈殿が、後の時代の「あらゆる人びとが楽しい造形美術をすること」が、必要であり、芸術家はおのれの表現ばかりにかまけてはいけな。自らの芸術家としての資質を社会へ、近未来の大人である子どもの育成のために役立てなければならぬとまで、言わしめるのです。子どもとの接点は、その後、純粋美術活動の背後に見えたり隠れたりしますが、1960年代からは、すでに述べたように造形美術の原理的な要素を取り込んだ、

「アートと遊ぼう」という子どものためのワークショップが実施されることとなります。芸術家の社会的な役割、つまり「芸術は楽しくて、生活を豊かにするものである」ということを教育的に実践するという前提から、ムナーリはアートの基本的な要素を盛り込んだ、前述の「アートと遊ぼう」のワークショップのような、子どものための造形プログラムを考え、実践することにしたのです。

さて、ここで、ムナーリが実践した子どもへの芸術的な貢献は、大体次のようにまとめられるでしょう。

- (1) 「本に出会う前の本」
- (2) 10種類の遊具の開発＝きっかけだけあって、終わりが無い「遊び」

- (3) さまざまな種類の絵本

- (4) 子どものためのワークショップ

- | | |
|------------|------------|
| a 木をつくろう | 自然の法則性から学ぶ |
| b テクスチャー | フロッターージュ |
| c 線でえがく | ステロタイプ |
| d 直接の投影 | 視点の拡大 |
| e さまざまなかたち | 想像力の誘発 |
| f コラージュ | 組み合わせからの表現 |
| g 色彩 | 赤を使った体験 |

これらのワークショップのプログラムは、1985年に「こどもの城」でムナーリ自ら、実践してくれたものです。しかし、行為があっはじめて体験的に感じるのプログラムを文字や口頭で語る隔靴搔痒の感じはお許しください。これらのプログラムは、自然の観察（＝木をつくろう）；質感（＝触覚・画材によって表現が異なること）；巨視的な視点の獲得体験；形と想像力；異質なものの出会いによる想像力の鍛練；色彩（＝赤を通じた感覚；「太陽をかこう」など、子どもたちが遊びながら、アートの原理を無理なく体験し、視覚言語の面白さと重要さを認識してゆくワークショップです。

- (1) 木をつくろう＝自然の法則性から学ぶ

木の成長を科学的に観察し、また過去の美術家が樹木をどのように描いたか、それらをもとにプログラムを作ったものが「木をつくろう」のプログラムです。

- (2) テクスチャー フロッターージュ

いろいろなものの表面をフロッターージュすることを通じてものの固有の質感（テクスチャー）を体験的に学習し、類推する感覚を養うプログラムです。

- (3) 線でえがく ステロタイプ

黒を使い、さまざまな画材で線を描くことから始まり、自分の描きたいものに相応しい画材を発見するプログラムです。

- (4) 直接の投影 視点の拡大

プロジェクターのスライドのマウントに透過性のものや不透過性のものをさまざまに挟み込んで、プロジェクターでスクリーンに巨大に写し出すプログラムです。

- (5) さまざまなかたち 想像力の誘発

自由に、不定形に切った紙のもつ形から、イメージを触発されて、そこにイメージを描き入れるプログラムです。

- (6) コラージュ 組み合わせからの表現

シュルレアリストたちがしたように、写真や映像、羽毛、糸などを思い思いに組み合わせて、それらとことなるイメージを作り上げるプログラムです。

- (7) 色彩 赤を使った体験

「太陽をえがこう」という本のテキストになっている、赤という色彩を用いたプログラムです。

このパネルディスカッションの後で、「こどもの城」の造形スタジオのスタッフが「木をつくろう」のプログラムを実際に行いますので、以上の六つのプログラムについては、百聞は一見にしかず」という諺通り、どのようなものが体験しないと理解しにくいことがお分かりになります。ブルーノ・ムナーリの実践した行為が今日的な意味で、どんなものであるか、それに少し触れられたとは思いますが、一番重要な部分がしり切れとんぼになってしまい、ムナーリの美術教育について、深く立ち入れませんでした。ムナーリは、アーティストで仕事を始め、さまざまな領域にわたる業績を積み重ねてゆきますが、その根底には、造形美術は人びとの生活を豊かにするものであり、難しいものではなくと終生言いつづけてきました。ですから今大会が設定したテーマである、「もっと豊かにもっと自由に～子どもと大人」は、ムナーリが目指したものの、そのものと言えるでしょう。ご静聴有り難うございました。

中川 ありがとうございます。今のお話の中には絵本学会の方がこれから研究するテーマ、ムナーリに限らなくても研究するヒントがあったと思います。それからお話の中にあつた『木をつくろう』と『太陽をかこう』という本は、ショップに駒形さんの本等と並べてあります。どうぞ御覧ください。それからみなさんに御提案したいんですが、シンポジウムは3時半まででワークショップが4時で30分も間があいていますので、3時45分位まで延ばしたいと思いますが、(拍手)ありがとうございます。それでは今井先生よろしくをお願いします。

今井 この本は、ムナーリの本の中で最も有名な絵本です。これは1968年に出版された『ミラノの霧の中で』というタイトルの絵本ですけれども、今日はこの絵本を中心にお話をしようかと思ひます。まず大きな特徴は、この本自体にデザインの考え方を積極的に取り入れているということです。この本は御覧になった方もいらっしゃると思いますが、今日初めての方もいらっしゃると思いますので、ざっとめくってみますのでどういう本であるかということとをまず頭に置いて頂きたいと思ひます。これは、先程デザインの視点と申し上げたんですが、それはどういうことかといいますと、まずこの絵本をつくっていくにあたって、1冊の本全体の造形、1冊の本全体をデザインするという考え方がこの中には取り上げられているということが特徴です。今ちょうどめくっているところがトレーシングペーパーで、半透明です。こういった素材ですね、ここでいうと紙ですね、こういった紙というものを徹底的に活かしていくという考え方もこの絵本の中の大きな特徴となっている訳です。そして、途中からは色のついた紙が入っています。ここではそれぞれ切り抜きが入っていたり、穴があいていたりという形で構成され、そこに印刷されています。ここは黒ですけども、印刷によって表現される色、要するに単純に原画があつてそれを絵本にしたという考え方ではないんですね。あくまでも印刷という1つの過程の中に表現されているということが、ムナーリの絵本の特徴となっています。本全体を1つの立体物ですね、比較的絵本という見開きの平面的な部分の中だけで見ていく傾向があるんですけども、ムナーリの場合は立体的な物として考えているということも大きな特徴になっています。例えばこれは、違った見方をすると、1つの仕掛けを扱ってい

るわけですね。通常は仕掛け絵本というとポップアップのような絵本を想像されると思いますが、これも十分仕掛けの入つた絵本ということが言える訳です。このような仕掛けがかなり重要な意味を持っています。それはどういうことかといいますと、読者との距離感の問題だと思ひますけれども、要するに見る側がどのようにこの本に関わってくるかという事の1つの演出としてこういった仕掛けがムナーリの中でも重要な役割を果たしている訳です。本というのは、必ずページをめくっていく事によってのみ次の物語が展開していくという関係があります。そのときに、ムナーリの場合は単純にページをめくって見るという関係を越えて、もっと身体的な関わりというか、全体を通して本の中に関わっていけるようなそういう仕掛けとしてこういったつくり方がされていると見ることができると思ひます。そういう意味では絵本を見るというよりはむしろ、これは僕の好きな言葉なんですけれども、体感する、要するに、見るのではなく体感するのだと、絵本を体感することによってここからムナーリの世界というものを感じ取っていくんだと思ひます。今ざっとめくつたんですけども、これはどういう風になっているのかといへば、まずトレーシングペーパーのページがありまして、ここでは霧の中という前提になっています。ちょうど霧の中をバスが向かっていくという光景をめくっていくことによって展開しています。みなさん経験があると思ひますけれども、霧の中を走っていくということは、遠い景色が見えない訳です。近い景色だけが見えている。それをうまくこのトレーシングペーパーの印刷によって表現しています。めくっていくことによってどんどんどんどん他の風景が見えてくる訳ですね。さらにめくっていくと反対側のページには、先程のページが重なりながら消えていく訳です。これも日常的な風景と全く同じな訳です。例えばバスの前に乗ってれば、前から見えている風景は霧の中を進んでいくことによってどんどん遠い風景が近付いてくる。そして後側の窓を見ると風景がどんどん遠ざかっていって霧の中に消えていきます。こういった感じがこの中で実に巧みに表現されている訳ですね。そしてこの霧の中をずっと進んでいってサーカス小屋に辿り着いていく訳なんですけれども、このサーカス小屋の風景も、単なるサーカス小屋で演じられているサーカスを見るという関係よりも、そこで演じられていること自体をむしろ空間としてここではとらえていく訳です。これをざっと見てもらつて分かると思ひますけれども、見るというよりも、自分自身がこの中に関わっていく関係でもある訳ですね。これが先程身体的な関わり、あるいは体感していくことなんですけれども、要するに自分の中で傍観者としてサーカスを見学するのではなくて、むしろその空間の中に入り込んだ状態、場合によっては自らもその中に参加しているような空間として、こういった切り抜きなり穴というものが上手く利用されているわけですね。そしてここで使われている色のついた紙もとても効果的に、まさに色彩的な言語として使われているということにも特徴がある訳ですね。今日は細かい内容までお話するということまでいきませんので、まず、この絵本がどういうものであるかということを知って頂くことから入りたいということで今御覧いただいている訳ですけれども、このサーカスが終わってそして帰る時には今度は森の中ですね、森の中の霧の中を帰っていくという形でこの本は閉じられている訳です。こういった本も現代ではない訳ではありませんので驚嘆ということまでいかないかも知れませんが、おそらく1968年当時この絵本はかなり画期的なものだったと思ひます。ただ、この絵本も日本では当初

はそれほど高い評価を受けることはなかったんですね。ある程度たつて、デザインとか色々な視点からこの本が評価されながら、少しずつムナリーという存在が明かになって、デザイナーの中で高い評価を受けた背景の中から少しずつ絵本の世界の中でもこのムナリーの『ミラノの霧の中で』というのは評価を得ていくことになるんです。必ずしも初期の段階では高い評価をされることはなかった。それはなぜかという、デザイン的な遊び的な要素が強いということがあったのかも知れませんがここにある絵本の考え方というのは、先程申し上げた色々な新しい方法論、特に時間だとか空間だとかいう概念が徹底的に違う視点から捉えられているということですね。絵本は確かに見開きを単位にした独立した空間であることは違いない訳ですね。ページをめくって次で次の場面に転換し、そして時間の経過へと発展していく訳です。ある意味で、ほとんどの絵本というのはめくって空間が場面転換していくそのプロセスの中でどう絵をつないでいくか、あるいはどのようにつくっていくかというところで作家の人たちは工夫をこらしていくという形が表現の中にもあると思うんですね。ところがムナリーの『ミラノの霧の中で』に描かれている世界というのは、トレーシングペーパーで扱っていた空間でも分かるように、単純に画面の見開き単位で展開していくものではありません。要するに前後、さらには過去現在未来というある時間軸に乗った空間の中で本そのものが見えてくる、そういった工夫がなされているというところに面白さを持っている訳です。そういう意味ではこの絵本というのは必ずしも客観的に見ていく世界という事ではなくて、読者、見る側が知らず知らずの内にムナリーの世界に引き込まれていく。ここではサーカスという世界が位置付けられているんですけども、それは同時にムナリーが考えている造形の世界あるいはイメージの世界あるいは様々なそこに発展していく自分の中でのいろんな言語の発展していく世界です。そういった世界の中に知らず知らずの内に引き込まれていくというのが、この本の大きな特徴なのではないかという風に考えられる訳です。ムナリーの面白いのは、この絵本もそうですが必ずしも完結したある物語をただ提示していくということではなくて、むしろ最終的には読者がある世界をつくり出していったり、物語をつくり出していき、そういった環境をつくるような仕掛けというか入り口を用意している、そういう考え方にむしろ近い訳ですね。ムナリーの世界の中では偶然性ということもかなり重要な役割を持っています。この偶然性というものが結果的には様々なできごとを起し、あるいはそこに突然何か思わぬことが立ち表れてくる。そういった偶然的な関係というものをムナリーはとてまじにする訳です。だからといってムナリー自身感覚的な世界だけを扱っているかというところではないんですね。これは岩崎さんが美術出版社にいらっした時に円と正方形の本を出版されていますけれども、その本なんかでも見られるように科学的、数学的な思考がムナリーの中のベースにとても大きく働いている訳です。特に自然の中の構造の中にも科学的、数学的に構成されている世界をきちっと把握しているという視点があるんですね。だけど世界はそれだけでも成り立ってはいない訳ですね。そういう意味でムナリーにとってはある秩序があり、一方ではそこに全く予期しない出来事が常に日常的にある。そういったバランスの中で、あるいはそういった関わりの中で1つの世界が成り立っている。ムナリー自身が提示していく世界というのは、そのような世界だと見ることもできるわけです。僕がだいたいしたいと思っていますのは、日常の我々の生活その

ものも同じなんですけれども、我々は今という現在に生きている訳です。当然時間だとか空間だとかを把握していこうとした時には必ず過去、現在、それから未来という時間軸があって、その現在という1つの確認ができるから実は過去があり未来がありさらには現在があるというそういう関係を持っている訳ですね。ところが往々にして1つの表現の形というのは、その現在性というところで物語を読みといていく傾向がある訳です。けれどもムナリーが重視している世界というのは、過去、現在、未来というつながりをもった時間の中で、自分自身がどうそこに関わっているかという、そういう提示をしているところに面白さを感じる訳ですね。ムナリーの作品の中では、絵本に限らず時間を扱ったものが多くあります。そういう意味でムナリーはある種時間の魔術師というか、そういう見方をしてもいい位時間に関する関心の非常に高い人です。それから、ここにありますが1953年につくられた『白と赤の読めない本』というまさに読めない本なんですけれども、これはどういう本かといいますと、めくっていきますと白と赤だけでこういう切り込みが入っているんですね。この本は単純に見ていけば、じゃあここにどういいう物語があるのかということになります。物語を感じ取るのであればそこに文字が配列されていることがあるじゃないか、当然そういうことになる訳ですね。ところがこれはまさに『読めない本』とタイトルにもなっています通り言葉もない、ましてやある具体的なかたちを持った状態がそこに描かれている訳でもない訳ですね。だけどこの本がとて面白なのは、自らがそこに物語をつくっていきける環境を持っていることですね。で、この本も1953年につくられて以降、似たようなシリーズで読めない本シリーズというのはその後にも出ているんですけども、ムナリーがここでとらえている世界というの、ムナリー自身が提示しているのはある1つの世界の入り口なんだということなんです。すべての物語、ある世界の答えを読者にすべて提示して、それを読み解いてもらう事が目的ではないんですね。あくまでもある1つの空間、あるいは創造的な世界をつくっていくのは読者なんだということですね。そのためにこういった表現の仕方もあり得る訳です。確かに非常に単純で幾何学的な形です。白と赤という単純な世界で成り立っている訳です。けどこの中には個人の経験、あるいは自分自身がこれまで持ってきた様々なもの見方、そういったものとすべて結びつきながら、自分なりにその世界を形成していくことが可能なんです。もう少し大袈裟な言い方をしてみますと我々の日常自体も実はそういうことじゃないかということでもある訳です。例えば、確かにこの空間もそうです、あるいはこの絵本館の周辺にある庭も含めてそうですが、一見ある何か具体的な形を持って現れてきているように感じている訳ですけども、じゃあそこにはある一定の物語が常にあるかっていうところではないんですね。我々はその中からある何かを選択し、それを結び付けながらある関係付けによって実は物語的なもの、あるいは意味を見出したり、関係付けているにしかすぎないということがある訳です。こういった単純な絵本も1つの世界なんですね。そういう風に見ていった時にこのような本の面白さが出てくる訳です。最後に言いたい部分だけお話ししたいと思いますんですけども、ムナリーの世界の中で1番お話をしたいと思っていますのは、ある種の絵本の対話性と言うか、あるいは身体的な関わりなんですけれども、特にこの身体的なかわりの大切さというのが、実は最近やや見過ごされがちなのではないだろうか。というのが私の中にある訳です。それはまず日常的なメディアそのものがそうですね。受動的

な関係の中で我々はメディアを享受するというにだんだん慣らされてきている訳ですね。特に映像的なメディアは享受するという関係をもって受け止めていく訳ですが、その結果、他の従来そうではなかったメディアに対しても受動的な関係の中で見ていく傾向がある。けれど、我々にとって重要なのは積極的、能動的にある対象に対して触れていくことだと思うんですね。その中でも特にここで大事にしてみたいと思っていますのが、例えば先程のムナーリの『ミラノの霧の中で』もそうです、この『白と赤の読めない本』もそうですけれども、実は指先を通して確認していく作業というのが非常に重要な意味を持っている訳です。確認していく作業というのは、おそらく人間にとって最も出発的な部分であると思うんです。例えば、まだ立てない、歩けない子どもにとって、はいはいが始まった時、子ども達はまずはいはいをしながら指先で世界を確認していくことになる訳ですね。で、指先で確認していくことによって自分自身のある空間、許容する空間というものを少しずつ拡張していきながらそこに壁であったりあるいは椅子であったり様々なものであったりというものを確認していく作業というのが、行われていると思うんですね。そういう意味でこの指先からの確認というのが非常に重要な意味を持っているし、その小さな子どもの指先を通じた世界の確認の延長線上の中に、我々の身体を通してものと触れていく機会というものがあるはずなんです。そういう意味で、我々はものを見るということをよく言いますが、実はものを見るという関係もただ目で見ていくという行為ではない訳です。ただ単純に物を見ていくということだけであれば、カメラと同じで網膜に映ったものを記憶し、それを頭の中にとどめておくという関係だけで終わってしまう訳ですが、実際には我々はもっと選択しながらものを見ていく訳です。例えばこの空間の中でも、例えば僕がここで話をしている場合だって、ある1つの点だけを凝視して話している訳ではないんです。いろんな場所を見たりしながら話をします。当然自分の体を動かしていくことによって実は視線も動いている訳です。眼球そのものも固定している訳ではありません。自分の体を動かしていくことによってある方向に向けていく訳です。そういう意味で身体的な関わりというもの人間にとって重要な意味を当然持っているはずなんです。それが、少しずつ我々は本を見る関係の中でも、より受動的で客観的に見ていくとして、だんだん距離を自分の中で離してしまうという、そういうことが少しずつ起きているような気がします。今回ムナーリを取り上げた大きな意味というのものも、改めて絵本を見ていくという時にその絵本の向こう側に持っているもう1つの大きな意味がなんなのかという時に、ムナーリが問いかけている非常に大きな問題というのは、コミュニケーションの本質、我々がコミュニケーションをとるといふことの本質がいったいなんなのかということとずっと問い続けてきた作家であるだろうと僕は思う訳です。で、そのコミュニケーションの本質とは人と人ということもあります、人とものとの関係もあります。あるいは人と自然という関係もあります。いずれにしてもムナーリはこういった絵本をつくる、あるいは様々なものを通して、そこで設定していた1つの意味というのは、どういう形で自分自身が提示した世界と、それから見る側との距離を縮め、なおかつそこに共有した1つの空間をつくりつつ、なおかつ読者が独自にまた新しい世界をつくり上げられるかという、そういったコミュニケーションのある重要な問題を常に提示しながら彼自身が仕事をしてきたような気がする訳です。特にこの絵本学会も今年で3年目に入っている訳

ですけれども、なぜじゃあ今絵本が重要なのかということを考えていく上でも、実は改めて絵本の持っている良さですね、それはある意味で自分自身の時間、自分のコントロールで絵本は見えていくことができる訳です。要するにページを繰る時間の概念というのもの、人によっては10分、人によっては1時間、あるいは3時間、これは全く自在に自分の世界な訳ですね。さらにはそこに描かれている要素をただ漫然と見るだけではなくて、そこには選択し、さらには画面と画面の隙間を読み解いていく世界がある。非常に緩やかな関係の中で、その中で自分の空間、それと世界というものをその向こう側に見ていくという世界を持っている訳ですね。そういう意味で、コンピューターや映像といった新しいメディアがより普及し日常生活の中でそのことが当たり前になってくればる程、実はこういった概念というものがもう1度見直されていいのではないかと。その時にムナーリは実は20世紀をそのまま生きてきた作家である訳ですが、ムナーリがずっと問い続けてきた問題というのは、最も人間の本質的な問題、要するに、何とコミュニケーションしているのか、どうやって世界をつくっているのか、我々はどう、何を創造していくかとしているのか、ということと改めて問いかけてきた人だという風に位置付けたいと思っている訳です。

中川 どうもありがとうございます。(拍手)私はちょっと知識がなくてこの間今井先生に教わったばかりなんです、この『霧の中のサーカス』を私達はトレーシングペーパーで見っていますが、最初はハトロン紙でつくってあったそうです。ですからムナーリが最初につくったのはハトロン紙だったということですね。私が持っているドイツ語の本では、『霧の中のサーカス』の木の場面のところに日本の盆栽の写真が載っています。ムナーリは1960年に来日し、1968年にこの本をつくっている訳なんです、日本文化にいろんな意味で非常に興味を持っていて、多分盆栽の形にも興味を持ったと思います。そうやって見ると、この木は盆栽的だなと思ったりします。私達は日本人ですので、そんな視点からも見ていただけたら面白いと思います。それでは駒形先生、よろしくお願ひします。

駒形 はじめまして駒形です。実は富山にお邪魔するのは今年2回目なんです、先の3月にこちら大島町絵本館にお招きいただいて、200組以上の親子の方々と楽しくワークショップが出来ました。その時確か富山で美味しいものと聞くと、初鰹が美味しいという風に聞いていたんですが、今日こちらに来る際に初鰹はいつかなと思ひながらやってまいりました。私は、デザイナーでもあり父親でもありまして、今日はですね、ブルーノ・ムナーリという私が尊敬するデザイナーの方の仕事を父親という立場からも見ていただきたいと思ひます。スライドも用意していますので、ビジュアル的にみなさんにお見せしながら進めていきたいと思ひます。私がはじめてブルーノ・ムナーリを知ったのは今から18年前の事です。私は1977年に渡米しましてロサンゼルスに最初住んでいたんですが、住み慣れたロスを離れてニューヨークに移り住んだんですね。その時は、仕事を探しながら、大きな作品を持っては毎日マンハッタンをうろうろ歩いていた訳なんです、その当時はアメリカ経済は非常に不況下で、仕事のチャンスも極めて厳しくてですね、結果として3ヶ月間は、ただただ歩くばかりという日々だったのです。そんな時に5番街にリゾリーという大きな書店があるんですが、こちらの方でブルーノ・ムナーリの本とはじめて出会ったんです。この本は、

1980年イタリアのダネーゼ社から出版されたプレブックスというムナーリが子どものためにつくったとても小さな12冊の本なんです。初めは、どうしてこれが子どものものであるかというのが率直な印象でした。でも何かとても興味を惹かれるんですね。このように色々な素材があって、これはフェルトですが、さまざまな素材を使ってつくっている訳です。その当時は、私は失業の身だったので、本を買うお金がなかったものですから何度も何度もその本屋さんに通っては、いわゆる、その、タダ見をしていた訳です。その時は残念ながら買うことは出来なかったのですが、それから4年後にニューヨークから帰国して、日本でブルーノ・ムナーリの活動を知ることになるんですが、1985年、こどもの城の開館の時に大きなブルーノ・ムナーリ展がありまして、残念ながら私はそれを見逃してはいるんですが、その後ですね、この念願の本を購入することが出来たのです。私は、もし自分の子どもが出来たら、この本と一緒に遊びたいに思っていた訳なんです、なかなか世の中ままならずですね、ついつい婚期を逃しまして、いつしかこの本は本棚のほごりにまみれることになってしまう訳ですが、それから6年後に人並みに結婚することが出来まして、子どもにも恵まれ、いよいよこの本の出番となった訳です。ではここで、スライドをご覧ください、どのような本だったのかという事をみなさんにご紹介したいと思います。(スライド準備)

これが私が最初に出会った本、イタリア語では、イ・プレ・リブレ、英語ではプレブックスとっているのですが、日本語に訳すと、本を見る前の本、もしくは、本の前の本というような言い方になると思います。この箱を開けるとですね、これは、12冊の内の1冊の本なんです、本の真ん中に小さな青い点が見えます。で、この本を1ページ1ページ開いてゆくとですね、小さな青い点が大きくなり、さらにページを広げるとまた大きくなるだけなんです。さらに広げますとさらに大きくなるというこの繰り返しのリズムだけなんです。で、どんどんどんどん青い点が大きくなっていき、やがてページ一杯に青が広がるんですが、今度はその青の中に小さな白い点が見えます。で、次にどうなるかといいますと、今度は白い点が大きくなり、さらに、これも白い点がただ単に大きくなるという本なんです。なぜこのような本が出来たのか、後程私の見解を述べたいと思いますが、まずスライドを見て頂きたいと思います。この本は色々なフィルムを使ってつくられた本です。例えばページを開けますと、今右側がブルーに見えるページがありますが、実はブルーのフィルムが重なっているんですね。ですから、単純にそのブルーのフィルムを返しますと、下にあった色がそのブルーのフィル

ムの影響を受けて色が変わるという仕掛けなんです。それからこれはですね、初め何も見えないんです。もう点だけなんです。で、これをめくるとまだ点ですね。で、もう1回めくってみると猫とかねずみが見えてくるんですね。つまり隠れていたものが見えてくる訳です。それから、これはここにもありますがフェルトでつくられたものなんです。で画面をよく見ていただくとですね、左側にボタンが見えます。右側にはボタンホールがあるんですね。つまり、ボタンをはめられちゃう訳ですね。極め付けはこの黒い本。こちらなんです、こちらは中を開けると、こんな風にですね、動物のしっぽの毛のようなものがこのページの真ん中に挟まれている訳です。まあ、このような本をですね、ブルーノ・ムナーリは12冊まとめて『本の前の本』というタイトルで出したのですが、私は、これらの本がなぜ子ども達のために存在するのかとても不思議だったんです。確かに見た目は何となくかわいらしくて、色々な素材でつくられているので大人の視点から見てもとっても面白い訳ですね。しかし、私が実際自分の子どもと向き合ってみて、はじめてブルーノ・ムナーリのメッセージを受け取ることが出来てきたのですが、彼は決して大人の視点だけでものをつくったのではなくて、むしろこどもの視点に立ってものづくりをしていると思います。まだまだ小さなお子さん、3歳でも4歳でも、非常に小さなお子さんというのは、本そのものを経験していない訳なんです。ですから本をいきなり渡すのではなくて、そもそも本とはいったいどういうものなのか、ということブルーノ・ムナーリは子ども達に伝えようとしたのではないと思う訳です。例えば本には色々な種類がありますよね。小説だったり、教科書だったり様々な用途に分類されていると思います。初めにご紹介した青い点の本、点がただひたすらに大きくなるだけなのですが、これを例えば歴史やドラマ、そういったストーリー性のあるものという風に置き換えてみるとですね、実に分かりやすくストーリーが変化していくことが、子どもが見た目で体験していくことができると思うんですね。それから例えば隠れていたものが見えてくる。これなんかきっと、推理小説という風に考えると、なかなか面白い見方になってくるんじゃないかなと思うんです。それからこの本なんです、実は私の娘もこの本と実に良く遊んで、全部が全部ぼろぼろになってしまったんですが、この本でうちの子どもは、ボタン通しという学習が出来た訳です。つまり本というのはいろいろなことを学習できる訳ですね。そのことをブルーノ・ムナーリなりの伝え方で子どもに伝えようとしたのではないかと私は思います。最後に極め付けのこの黒い本。これは私驚いたのですが、なぜ動物のしっぽのようなものがここにいいのか。これですね。



パネルディスカッション会場

色々考えました。いったいブルーノ・ムナーリは何を考えたのか。これは私の見解なのですが、例えば子どもがですね、猫そのものを知らずに、いきなり猫のしっぽをつかんだとしますね。そうすると、まあ良く有りがちなことなのですが、大抵猫は逆毛を立てて驚いてですね、子どももそのことによって非常に驚いてしまって、もしかしたらそれ以来動物が苦手になってしまうかも知れないんですね。ところがこういう本の中で、そういうものを1度体験すると、子どもがもしはじめて猫に触る時にでもおそらく、そーっと触れるというような体験、つまり学習がされているので、実際には驚く場面が軽減されると思うんです。つまりブルーノ・ムナーリは、本というのは、とても安心できる状態で、色々なものが体験でき、しかも学習できるということを私達に伝えようとしているのではないかと私は思います。またブルーノ・ムナーリは積極的に子ども達を表現者として見ています。私達大人はついつい固定概念という衣を身にまとして、子ども達に何が正しく何が誤っているのかを一生懸命伝えようとするあまりに時として、ものの見方や感じ方でも制約してしまうことがしばしばあるのではないかと思います。次のスライドをご覧くださいなのですが、これらもですね、やはりイタリアのダネーゼ社から出版されたブルーノ・ムナーリのワークブックのシリーズのうち2つなんですけど、このくらいの大きな箱なんです。で、その中の1つには、このように、15cm位のいろんな写真のカードが入っています。これはいろいろな角度から1つのものをとらえた写真なんですけど、例えば、これはもう明らかに魚の写真ですね。大抵の場合我々大人はここで十分だと思ってしまうんですね。つまり、魚の横の写真を見せれば子どもは魚という風に分かる、理解できる。それは、単なる魚としての情報だけなんです。ところがブルーノ・ムナーリは、ものの見方をここで伝えようとしている訳です。例えば、これは、真上から見たものですね。魚も上から見るとずいぶんとほっそりしているもんですね。で、次に、これ真後ろです。さらにですね、これは真正面ですね。何かのお面みたいに見えるんですが、つまり色々な角度から見ると、魚1つとっても実はいろんな見え方がある訳です。それからさらにですね、これ一体なんだろうかね。ちょっと想像して頂きたいんですが、これは実は電球だったんですね。電球を真上から見た写真だったんです。このようにブルーノ・ムナーリは1つのものを色々な視点から観察するというものの見方を一生懸命子ども達に伝えて、私達おとなはついつい1つしか見せなくて、これが魚なんだぞと言ってしまふ場合が多いと思うんですね。でもこんなに色々な見方があるということ、子ども達の周りにあるものの見方が、必然的に変わってくると思うんです。さらにブルーノ・ムナーリは、いくつかの表現手段を紹介しています。これは先程の魚をカラー写真で撮ったものなんですけど、次のカードでは、このように鉛筆で描いたものですね。さらに、水彩で描いたもの、それからこれはアウトラインだけですね。アウトラインだけでも魚を感じることが出来ますよね。もっと省略したものがこんな風になってしましますが、これも、あじの開きかなんか食べたあとこんなふうに残ってますよね。これだけでも魚を感じられると思うんです。それからあとこんな風に、デザイン用語でモディファイと言うんですが、おもいきり整理してシンプルにしたようなものがあります。このように様々な表現手法を見せていくことで、ブルーノ・ムナーリは魚そのものを、感じさせようとしている訳ですね。つまりものの見方とか、ものの感じ方、それを固定概念に捕われることなく、自由に感じ取っていくと言うことを

我々に伝えているのではないかと思います。これでスライドは終わりです。ブルーノ・ムナーリは、非常に親日家としても知られているんですが、特に日本の文化を大変興味深く観察しておりまして、例えば、日本人が上手にはしを使いこなす様子に、とても感心しています。欧米では食卓にかなり多くの数のフォークやナイフがセットされる訳ですね。私もしばしば当惑してしまって、何がどう違うのかさっぱり分からないんですが、時として公式なディナーレセプションに招かれたりすると、あやしいテーブルマナーなんですけど、とりあえず外側から使えばいいんだというのを実行しているにすぎないのですが、しかし、ブルーノ・ムナーリは私達日本の文化にいろいろの意味で柔軟性と言うか、合理性を見出し出している訳です。と言いますのは、例えば、はし、これは単なる棒2本の組み合わせだけなんです。ところが欧米人はいっぱい種類の違ったフォークやナイフを準備しなくてはならないし、場所もとるし、その収納場所も必要とする訳です。ところが我々日本人は、はし、その棒2本できれいに色々なものを食べることが出来る訳ですね。このような日本人の合理性や柔軟性にムナーリは注目しています。さらにあるヨーロッパの建築家は日本家屋の襖や障子、屏風を見てですね、それを「紙の壁」と評したんです。彼等の建築様式では、部屋を仕切る時には非常に分厚い壁で仕切る訳です。ところが日本の古い家屋はその「紙の壁」によって仕切られている訳です。しかも非常に大きな部屋を、いとも簡単に小さな部屋に分けることも出来ますし、またいとも簡単に元の部屋に戻すことも出来る訳です。さらに、日本家屋の障子は、障子を通して入ってくる光はやわらかく緩和され、私達にとっても居心地のよい場所を提供してくれる訳ですね。ですからこうした日本文化の柔軟性とか自在性、そういったものにブルーノ・ムナーリは共感していたのではないかなと思うんです。なぜならそこは、いつでも風通しの良い、人が自由に集える場所だと思えるからです。しかし、残念ながら日本文化のこうした財産は失われつつあります。戦後の大量生産、大量消費社会の成長は、私達に確かに多大な恩恵、つまり便利さをもたらしてくれたのですが、一方で、次世代に大きな問題を残しているのではないかなと思います。1994年、この年は私がフランスで展覧会を開いた初めての年だったのですが、この時に敬愛するブルーノ・ムナーリから私の仕事に対して賛辞を頂いたことは、何よりの喜びでした。昨年10月にムナーリの訃報を知り、その日はちょうどニューカレドニアへ発つ直前だったのですが、今でもその時の事が蘇ってきます。享年91歳、非常に高齢な方だったのですが、最後の最後まで私達にいろいろな可能性を教えてくれたブルーノ・ムナーリの御冥福をここでみなさんとお祈りしたいと思います。そして最近活字離れとか本離れと言われて久しい昨今なんですけど、もともと日本にある柔軟性と自在性をフルに発揮して、より本の可能性が広がり、もっともっと柔軟で活力のある出版活動の復活を切望しております。今日は本当にご静聴ありがとうございました。

中川 どうもありがとうございました。スライドを見せて頂いて、みなさん本当に楽しんでいただけたと思います。私はいつか本に書きたいと思っていますが、駒形さんの「ぼく、生まれるよ!」というお腹の中の赤ちゃんが生まれる本があります。先程駒形さんが、障子の光を通してという話をなさいましたが、お腹の中の赤ちゃんが、明るく感じているのを、紙質などで、素敵に表わしています。それから他の先生からも素材としての紙の話がありましたが、「ぼく、

生まれるよ！」の表紙を紙の手触りが母親の暖かさのようになるように研究なさって、改定本を出されています。そんな意味からも駒形さんはムナーリのとてもいい精神的な後継者だと思います。それから先程魚のいろんな絵が出ましたが、私も教育学部の美術にいる経験を申しますと、たとえば1年生に馬を描きなさいといいますが、ほとんどの学生が横向きしか描きません。前とか後ろとかはやっぱり描きづらいとか頭の中に形が入っていないんですね。ですからムナーリのああいったカードで遊んだなら、ものを多面的に見ることができ、絵にも定まった方向でない所から見た形を描く学生が出てくるのではないかと思います。それから最初に見せて頂いた、「プレ・リプリ」の本は、だいたいああいった本は日本では書店で売ってなくて、私はかなり前に原美術館で見つけて買い、それを図書館に登録してもらおうとしたら、図書館の方から戻ってきて、「これは本ではない。本ではないから消耗品で買って」と言われました。本でしたら大学に登録するんですけど、消耗品なので、もう消耗してしまっていて、もう私のものです(笑)。でも、本ではないと言われたものが、この絵本学会で本として紹介されるというのは、やっぱり時代も非常に変わってきたし、私達も新しい目で物事を見ていかなくてはいけないと感じております。それでは、まだ7分程ありますので、どうしてもこのことについて言っておきたいということがございましたら、1言ずつお願いします。岩崎先生どうぞ。

岩崎 ぼくは概論的にしか話をしなかったのですが、彼の作品、その他について話をすることは出来なかったのですが、明日のラウンドテーブルで何か今日お話できなかったことについては触れることができるのではないかと思いますので私はありません。

中川 今井先生どうぞ

今井 それでは1言だけ。ちょうど3人の話の中で共通した部分があったと思うんですけど、まず、岩崎さんの方から、おとなは自ら世界観を確立してしまっていると。こども時代にもっとアートの原理を伝えていけば、もっとアートの本質に触れることができるんじゃないかというようなお話があったと思うんです。それから駒形さんの方からは、おとなは非常に固定的な概念でものを見てしまっている。だけどこどもはもっと自由に創造できるという風なお話があったと思うんですね。だけど本当は、おとなになってもその柔軟さを失ってはまずいということを言い続けているのがムナーリなんだと思うんですね。そういう意味では、どうしても考えてみたいと思いますのは、絵本でもそうです、あるいは1枚の絵でもそうですけれども、我々は知識でそのことを判断しようとする傾向が非常に強いと思うんですね。例えば、誰々の絵である、で、誰々の絵はたとえば何年代に描かれた、例えば印象派の絵である、だからこういう表現がされている、というような1つの知識によってその絵を読み取ろうとする訳ですね。でもこれはあくまでも、知識による補助を得ての読み取りであって、自分自身の読み取りではない訳ですね。やはり大事なのは、自らがどう読み解いていくかということだと思います。そのためにこどもの頃から多くの絵に触れる、あるいは多くの絵本に触れていく、あるいは多くの世界に触れていく。そのことによって、様々にそこで自分自身が確認した作業というものがどう残っていくかということがとても重要なんだと思うんですね。そ

れが、大袈裟な言い方をしますと、ある種の美意識なり、あるいは自分なりの世界に対するものの見方として定着していったと思えます。ですから、おとなになってからもそうだと思うんですけど、できるだけ柔軟に、柔軟な形で、あくまでも、改めて今私達は初めてそのものに触れているんだという位の、そういった気持ちでものに触れていくことができれば、実はもっと世界は面白いし、またムナーリの世界がなぜこういう世界だったかということが、より理解できるんじゃないかなと思っています。

中川 ありがとうございます。駒形先生どうぞ。

駒形 私は実際に自分に子どもが出来て、女房と一緒に子育ての現場を経験した人間なんですけど、時々女房が、子どもが泣いていたりどうしていいかわからない時に、例えば子育てのガイドブックとかを買ってきて見た方がいいのかなという相談を何度か受けたんですけど、できる限りの私のアドバイスは、「親はあなた1人なんだから、自分の子どもを感じてほしい」ということでした。実はこのことを教えられたのが、ムナーリの仕事だと思っています。つまりムナーリは、「感じる」ということをとても色々な表現の中でいっぱいちりばめてくれて、私達はそれを感じ取ることによって、ムナーリのメッセージを受け取ることが出来たんですね。ですから私は、どうも最近マニュアル的なものとか、受け身一方の世の中が広がりつつあるのですが、もっと私達が五感という大脳のはたらきを活発にして、「感じる」ということをもっともっとできればな、と思っています。ときどき、おとなになると傷付くのが嫌なものですから、感じることを止めてしまうのですが、結局今の子どものいじめの問題もそうだと思うのですが、どうもこの傷付くのが怖いという部分も多分に影響してきていると思います。ですから私達がいろいろなものを感じて、いろいろな形で表現できて、で、そういうものがうまく機能していけば、人と人のコミュニケーションは、もっと風通しのいいものになるんじゃないかなと思います。私は、ブルーノ・ムナーリは、この「感じる」ということを教えてくれた、とてもすばらしいアーティストであると思っています。

中川 ありがとうございます。私も1言だけ言わせて頂きます。ムナーリは第2期未来派といわれまして、あまり未来派的ではないとよくいわれていますが、未来派は例えば、未来派彫刻家宣言をしたポッチョーニなんていう人は、彫刻のいろんな素材の可能性を言っているんですね。未来派自体は実際にはそれほど新しい素材を使った訳ではないんですが、可能性を提言した訳です。絵本作家としてのムナーリも、そういった美術の流れに乗ってその可能性を引き継いでいるんです。絵本は、そういったところとちょっと別の場所で語られ過ぎているのではないかな、と私は思います。ですから、みなさんにももうちょっと美術的な色々な流れや影響を踏まえながら絵本というものを見て頂きたいと思います。それからもう1つ御連絡致しますと、次のワークショップは、「木をつくろう」といいます。これもムナーリの試みを引き継いで行うものなのでどうぞご覧になって下さい。それでは今日は本当にありがとうございました。



ワークショップ会場
「みんなでつくった木をもちあげてみよう！
風がふいてきたら、木はどうなるかな？」

【ワークショップ】6月19日（土）16:00～17:00

「木をつくろう」

指導 有福一昭（こどもの城）

こどもの城スタッフ

会場：大島町絵本館パフォーマンスホール

このプログラムは、ブルーノ・ムナーリが木は上の枝にいくほど下の枝より細くなるという、成長の法則を「造形遊び」として作り上げたプログラムです。子どもたちが広い床の上で紙の木を成長させながら、「自然の法則」を体験学習するプログラムとなっています。作りながら学んでいく造形的な遊びのプログラムです。

大島町絵本館パフォーマンスホールに集まった約40名の子どもたちは、ここで何が始まるのか、どんな木を作るのか興味津々といった感じでした。「木ってどんな形をしている？」という私の問いかけにも、すぐに木のポーズをとったりと、それぞれに木のイメージを広げていきました。

見本の紙を2等分、4等分、8等分……に切ってつないで壁面に木を作ってみせた後で協力して子どもたちと一緒にホールの床いっぱい木を作っていきます。絵本館ボランティア・スタッフの協力で子どもたちは、大きな幹、幹から枝分かれしていく枝を次々と伸ばしていき、立派な木が完成しました。木の形は子どもたちが決めた枝の方向によって扇型や風になびく形などになります。次に子どもたちは、A3サイズ位の用紙に思い思いの葉っぱをカラフルに描き、はさみで切って木に貼ったり、直接木の幹や枝に花、鳥、虫、小動物などを描いたりしていきます。紙をつないで枝を作っていく時のダイナミックな動きは一変して、子どもたちは描くことに集中し

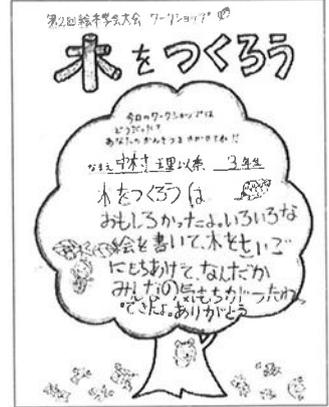
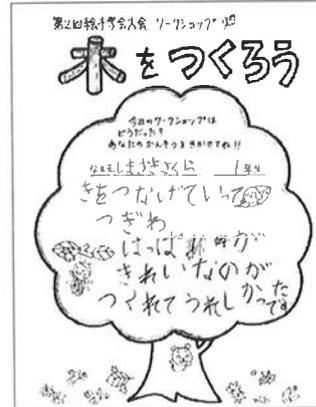
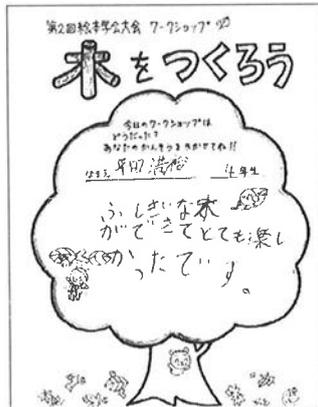
ていました。木の幹や枝に描くものは、木に住むものだけではなく、海の生物や、想像上の生物であったりさまざまです。そして、見たこともない木が出来上がりました。

最後にみんなで木を床の上に立てようとしています。ひとりが勝手に持ち上げると紙の木は壊れてしまいます。肩、膝、爪先、胸の高さ……一番高くと全員が協力して木を立ち上げました。会場から拍手が起こり、その時子どもたちはムナーリの言う「創造的遊戯」の世界から現実の世界に戻ってきたようです。

想像上の木かもしれませんが、ふだん気にしていない樹木を丁寧に観察することで誰でもが参加できる遊びにしたあげたムナーリの着眼点の素晴らしさがここに 있습니다。そして、ワークショップをおこなう度に指導に携わる者にとって、常にいろいろなものを注意深く観察し、新鮮な感受性を維持する必要性を感じています。

(有福一昭)

写真右：有福氏



【研究発表】6月20日(日) 9:30～12:10

A会場:大島町社会福祉センター 創作室

●韓国民話絵本に関する一考察

－「闇の国から来たむく犬」について－

【発表者】 斎木恭子（鳥取女子短期大学）

【要旨】本研究の目的は、韓国の民話絵本「闇の国から来たむく犬」を分析し、その特徴、作品世界に現れた主題・思想等について明らかにすることにある。

この絵本の題材となったのは、「火の犬」と呼ばれる日食・月食の由来譚である。暗闇の国の王から明かりを盗んでくるよう命じられた犬は東に向かい太陽をくわえるが、熱さのためにどうすることもできない。今度は西に向かって月を盗もうとするが、あまりの冷たさに長くくわえることができない。太陽と月を何度もくわえたり離したりするので日食と月食が起こるといのである。この絵本の最大の特徴は、高句麗時代の古墳壁画としてよく知られる四神、すなわち青龍、白虎、朱雀、玄武を登場させたことにある。太陽と青龍あるいは月と白虎を結びつけ、玄武を賢者、朱雀を救済者とするなど、本来の話には登場しない四神や韓民族の寿福招来のシンボルカラーである青白赤黒黄の五色を配し、長寿・不死のイメージを伴う十長生を描くなど、絵画面には韓国特有の芸術性と同時に作家の招福辟邪の気持ちが表されている。文学的な面からみると、本来、昔話に登場する人物には内面的世界が感じられないとされるが、この絵本では、玄武により詞で心理が語られる場面がある。

韓国では、そのないようが倫理的かつ教育的で児童教育にふさわしい対象であるという意味から、昔話＝伝来童話という名称が広く使われ、子どもたちへのしつけとして伝承・活用されてきた。この絵本では、原話にはない伝来童話の特性でもある「勤善懲悪」の主題、弱者守護の法則を打ち出した。話の展開にも「苦尽甘来（不幸の後に幸福が来る）」、「至誠感天（まごころは神をも動かして、良い結果がうまれる）」の哲理をほどこすなど、子どもたちに肯定的な人間性と美的な情緒を涵養しようとした作家の意図が込められた作品となっていると言える。※本作品は翻訳出版されていないため、邦題「闇の国から来たむく犬」（CHUNG SEUNG GAK 作・絵、トンナム、1994）は斎木の意識によるものである。

●「日本一の画壱」における絵本の近代性

【発表者】 村川京子（大阪薫英女子短期大学）

【要旨】近代日本の絵本史上その美しさ、モダンな雰囲気が高い評価を得ているのが中西屋発行「日本一の画壱」の絵本シリーズである。たて12.8cm横7.8cmのミニチュア絵本は1911年9月から1915年9月にかけて発行された。

35冊の文章はすべて巖谷小波、絵は岡野栄、小林鐘吉、杉浦非水が担当している。

この絵本シリーズのどのような点がそれまでの絵本と異なる特徴といえるのか。

第一は作品内容においては昔話のみならず創作の物語、知識、伝記、歴史的人物を含む多様な内容を幼児対象の単行本絵本シリーズとした点である。これは「こどもには昔話」という枠から、近代の幼児教育の概念が導入されるとともに幼児にふさわしい物語の必要性が認識され始めた現われと考える。日本と世界の昔話に通じ、幼年絵雑誌に無数の「お話」を創作していた小波ならではのシリーズであ

る。駄洒落、ごろ合わせも取り入れたリズムカルな文章は、いつまでも子どもの心に残ったであろう。

第二は挿し絵の変化である。岡野栄、小林鐘吉、杉浦非水らは「白馬会」に所属する洋画家である。昔話の挿し絵を新しい感覚で表現しようとしたのである。従来の絵本の挿し絵は彫刻や筆の繊細な線と、微妙な色の美しさで表現していた。それがシンプルなシルエットと背景の色の変化で表現した革新的なシリーズとなったのである。第三は「本」としての美しさを意識的に追求している点である。イギリスのウィリアム・モリスが手工芸品の美しさを本造りに生かしたように、この小さい絵本は表紙から裏表紙、そしてシリーズをおさめる木製の本棚、麦藁細工の小函まで美しく機能的にデザインされている。子どもの絵本の中に芸術と技術の統合を見ようとしたのである。杉浦非水のデザインの業績のなかでは忘れられがちだが、本としての質を高めるためにデザインの思想は必要なものであり、絵本の近代化に欠かせぬ視点であろう。

●古川正雄文・八田小雲絵「絵入智慧の環」

－近代日本絵本史のルーツ－

【発表者】 鳥越信（聖和大学）

【要旨】明治維新以後の歴史の近代の初期に出版された児童図書の中には、「図解」「絵入」「画引」「絵解」といった言葉が、題名に含まれるものがしばしば見られる。しかし、それらがすべて今日いうところの「絵本」というわけではない。

第一、「絵本」という言葉はすでにあっただが、それは現在広く社会的に認知され、市民権を確立している「絵本」とは、内容も概念も全く異なるものだった。したがって、当時の作家や画家や編集者たちの意識に、今使われている意味での絵本作りという発想は、生まれるはずもなかったといえる。

しかし、そうした時代状況の中にあっただが、近代日本絵本史のルーツともいべき出版物が出ている。それが1870年から72年にかけて、岡田屋嘉七が刊行した古川正雄文・八田小雲絵『絵入智慧の環』である。

これは全八冊よりなるシリーズだが、特に全体の第一、二冊目に当たる初編上・下は、「詞の巻」という題名が示すように、上では単語、数字、天文、四季など、下では名詞、形容詞などのほかに、「わたりものなよせ」つまり「舶来品の名寄せ」として、汽車、自動車、時計等から動植物に至るまでの名前を教えることを目的にしている。他の巻も全体としては同じような構成だが、この二冊にはすべてイラストがついている点が大きな特色である。つまり、今もたくさん出まわっている物や出来事などの名前をイラスト入りで示した「知識絵本」あるいは「文字・ことば絵本」ときわめて近いレイアウトの本だといえるのである。

本発表では、デジタル・ビデオを使って具体的な内容を見てもらいながら、現在の類似した内容を持つ絵本との比較も含めて、絵本作りの目的意識がなかった時期に生まれた、限りなく絵本に近い本の到達点と限界とを考えてみたい。

B会場:大島町中央公民館 大会議室

●赤ちゃん絵本のアンケート調査から

一冊子「赤ちゃん絵本226冊」を出して－

【発表者】 芝村紀代 札幌市中央図書館えほん研究会講師

【要旨】1990年代から絵本の中でもとりわけ赤ちゃん絵本の出版



研究発表会場の様子

が市場に目につくようになってきた。札幌市中央図書館絵本研究会は13年前から絵本作家の研究や読み聞かせ絵本のリスト作りに取り組んで来たが、4年前、この発展著しい赤ちゃん絵本を取り上げることとした。その結果を昨年3月『アンケートから見えてきた赤ちゃん絵本226冊』として冊子にまとめたが、今回はその調査過程と冊子の内容、並びに今後の研究課題について報告したい。

〈調査過程〉

- ・市場調査――現在市販されている赤ちゃん絵本の数量把握。
児童書出版社にアンケート実施。
各社出版目録による赤ちゃん絵本総リスト。
出版社数 69社 赤ちゃん絵本 1351冊
- ・プレ調査――アンケート実施前に複数の親子から赤ちゃんの反応を取り、アンケート項目の参考とした。
- ・アンケート調査――0・1・2歳の子を持つ親に10冊1セットの絵本を渡し、アンケート依頼。アンケート総数 2460枚

〈冊子内容〉

- ・赤ちゃん絵本を4領域に分類――認識・環境・感覚・物語
- ・冊子掲載方法――4領域をさらに15項目に分類し、各項目に代表的な絵本226冊を選び、赤ちゃんの反応を服す、直接明記した。
- ・226冊の選定方法――各項目の内赤ちゃんの反応のいいものが中心になったが、必ずしもそれだけでなく、問題を含むものも今後の研究課題として取り入れた。

〈今後の研究課題〉

現在、赤ちゃん絵本の名称やその対象年齢も明確に定義されていないが、それにも関わらず市場には次々と赤ちゃん絵本が出版されている。その領域についても、今回の分類が初めての試みである。こどもの発達過程を踏まえた上で、各領域の赤ちゃん絵本がどうあるべきかは、今回の調査を参考に改めて考えてみたい課題である。

●読み聞かせの小さな試み―お母さんを巻き込んで― 【発表者】加藤美穂子（やまがた絵本クラブ主宰）

【趣旨】15年近く図書館で読み聞かせの活動をしてきた。それは、こちらがたまたま選んだ本をたまたま来た子たちに読んであげて、その場で完結させるというものだった。しかし絵本はくり返して読まれてこそ価値があるという特質を考えると、その場限りということには長年疑問を感じてきた。図書館での読み聞かせ活動をなんとか家庭までつなげられないものだろうか。1年4ヶ月かけて、山形

市立図書館の霞城分館（絵本の蔵書数約10,000冊）で子どもを連れて読み聞かせにいらしたお母さんといっしょに模索してみた。

活動のポイントは、

!読み聞かせする本の複本を本館と4つの分館から出来るだけたくさん集める。

"読み聞かせで出会った本の何冊かは、どの子ども必ずその場で借りていけるようにする。

#よい絵本のリストから毎回ブックトークする。

\$絵本のできたいきさつや作者の生い立ちなど、エピソードを紹介する。

%絵本に関する相談をうける。

結果、

!子どもは読み聞かせてもらっておもしろいと思った本は、その場ですぐ借りていく。

"家庭でくり返し読むことで絵本のよさを発見できた。

#お母さんたちは、子どもを読み聞かせに連れてきているというよりも、自分が絵本を楽しむすべを見つけるために参加している。

今までの読み聞かせスタイルを変えることによって図書館側には次のような効果が現れた。

!貸し出しの増加。

"リクエストの増加。

また次のような問題点も職員に指摘された。

!カウンター脇の狭い場所だったため、公共の場を一時的に読み聞かせで占有すること。

"同じ本が一時的に一箇所にストックされる。

#一度に多量の貸し出しがある と図書館の日常業務がストップする。
読み聞かせにいらしたお母さんたちの関心も高まり、やまがた絵本クラブという絵本の楽しさを広める会もでき、10団体27名のメンバーが現在、情報交換や、おはなしグッズの制作、読み聞かせの勉強をしている。読み聞かせにお母さんたちを巻き込むことによって絵本の活動が思いの外広がりをを見せている。

●児童のおすすめリストから始まる絵本読書の新しい可能性

【発表者】米谷茂則（千葉県浦安市立富岡小学校）

【趣旨】小学校における絵本の読書指導の実践としては、読み聞かせの提示が多い。例えば、全国的な雑誌では、最近にあって、次のように「読み聞かせ」が出てきている。



研究発表会場の様子

『学校図書館』1996年2月「読み聞かせによる図書紹介」（但し、絵本だけではない）、1998年1月「PTA（父親）による読み聞かせの試み」

『教育科学国語教育』1997年8月「読書力を育てるための新提案・低学年編」を5人が書いている。そのうち3人の提案に「読み聞かせ」が含まれている。

この2誌は校内や書店で入手しやすい雑誌である。市や県レベルの研究会では数多くの発表がなされている。さらに平成10年版学習指導要領・国語科の「読むこと」の「内容の取扱い」において、具体的な指導例を示しており、その〔第1学年及び第2学年〕で「昔話や童話などの読み聞かせを聞くこと」と示されている。したがって今後も小学校の学級現場では「読み聞かせ」が実施されていくことが予想される。

しかし、「読み聞かせ」には批判もある。学校教育の方向は、教師主導の授業から児童主体の学習へと変換しようとしている現在にあって、いつまでも「読み聞かせ」が絵本読書の代表であるかの感を抱かせるのはよくない。「読み聞かせ」自体は何も小学校の専売ではなく、幼稚園などでも実践されている。そのことを考えると、小学校低学年では不要とも言える。問題は児童を読書へ誘えるかどうかである。私自身の実践でいえば、教師の「読み聞かせ」などより、大変効果があったのが、児童どうしのおすすめリストから多読へと進むということである。これについては1年生、3年生、4年生の実践を提示したい。どういう絵本がどの程度読まれたのかについて、具体的に効果を提示する。つぎに、絵本の多読から、他にどのような絵本読書が可能なのか、実践を伴った方向性を提示したい。1年生では、絵本を中心とした楽しい読書活動集会。3年生では、同じタイトルで画家の違う絵本についての絵を中心とした比較の学習。5年生では、森林の調べ学習における絵本の利用。このような実践の中から、新しい絵本読書の可能性を探っていきたい。

●小学校1年生国語の授業における絵本の利用 絵本の紹介と子ども達の創作作品紹介

【発表者】神戸由美（加藤学園暁秀初等学校）

【趣旨】1998年4月から1999年3月まで、小学校1年生を対象とした国語の授業の中で、たくさんの絵本を使ってきました。読み聞かせ、絵本を使った書き替え、絵本にアイデアを得た子どもによる絵本の創作など、種類は様々です。

今回の学会では、時間の許す限り、授業で実際に使ってみて、子ども達に喜ばれた絵本の紹介と共に、その絵本を利用して作った子ども達の作品をご紹介します。その絵本を利用して作った子ども達の作品をご紹介します。その絵本を利用して作った子ども達の作品をご紹介します。

学校名：加藤学園暁秀初等学校

所在地：静岡県沼津市大岡自由が丘1979

対象：小学校1年生クラス1（男11 女11）

・クラス2（男12 女10）

以下は、子ども達が好きな絵本と、その絵本を使って子ども達が作った作品です。

1. 『たぬきのおじさんおっこちた』（藤本ともひこ リプロポート）を参考にして
子どもによる創作絵本「かえるのおじさんおっこちた」
子どもによる創作絵本「うさぎのおじさんおっこちた」
2. 『おさるのまいにち』（いとうひろし 講談社）を参考にして
子どもによる創作絵本「おさるのまいにち2」
全文書き写し本
全文書き写し紙芝居
3. 『10びきのかえる』（間所ひさこ PHP）を参考にして
子どもによる創作絵本「10びきのかえるのぼうけん」
4. 『くまさんのあたらしいカーテン』（末崎茂樹 佼成出版社）を参考にして
子どもによる創作絵本「くまさんのよっつのカーテン」
5. 『100万回生きたねこ』（佐野洋子 講談社）を参考にして
子どもによる創作ビッグブック「みんなにかわれたねこ」
6. 『ぼくのわく星かんらん車』（山末やすえ 大日本図書）を参考にして
子どもによるビッグブック「ぼくのわく星かんらん車・クイズ付」
7. 以下の絵本を全文書き写して自分の絵本を作りました
『3びきのくま』（永岡書店）
『あきみつけた』（ヤン・クドラチェック作）
『ヘレン・ケラー』（世界名作ファンタジー30 ポプラ社）
『こわりやのぶるる』（有賀忍 講談社）
8. 以下の絵本を全文書き写して紙芝居を作りました
『しゃんかんのメリークリスマス』（森山京 講談社）



C会場：大島町社会福祉センター 集会室

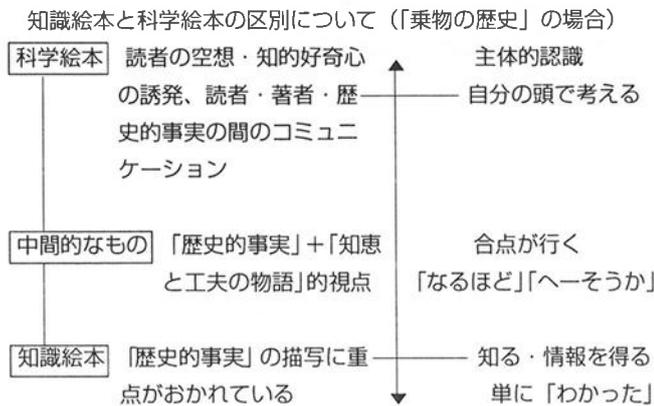
●科学絵本と知識絵本の区別について

－「乗り物の歴史」をテーマにして－

【発表者】瀧川光治 聖和大学大学院

【要旨】・知識絵本と科学絵本は区別されるべきである。

現在、「科学絵本とは何か」という定説はない。これは科学読み物においても同様である。しかし、著者は、此れ迄の著者自身の研究を踏まえて、「単なる知識絵本」と「科学絵本」とは区別されるべきであり、その区別をしたのちに「知識絵本/科学絵本」の評価を行うべきだと考える。またこれらはノンフィクション絵本の分野であるが、それは「知識絵本」にとどまるよりも、「科学絵本」を意図したほうが子どもの興味関心を引くと考える。



・「乗り物の歴史」をテーマにした絵本の場合

- (1) 本格的な科学絵本＝板倉聖宣『自転車の発明（いたすらはかせのかぐの本11）』国土社、1981
- (2) 単なる知識絵本＝『日本の自動車の歴史』『飛びたかった人たち』（福音館たぐさんのふしぎ傑作集）
- (3) 中間的な段階＝『飛行機』『汽車』東京社、昭和12年（『小学科学絵本』全12冊）

●絵本の可能性!－早期教育目的の教材として

ワイルドスミスの『1 2 3』に見る数字の視覚化について

【発表者】元木郁子（ワイルドスミス美術館（株式会社エム・エ・エム））

【趣旨】昨年の発表では、絵とテキストの相関性による絵本の可能性について述べた。今回は、絵本の可能性の一つである早期教育における役割から、その分野の傑作－ワイルドスミスの『1 2 3』を取

り上げ、その意義について検証する。

絵本のイラストレーションには、言語による理解の不足を補うという役割がある。例えば、「ひこうき」を知らない子どもに「ひこうき」を教えるとき、絵は、「ひこうき」の形体や機能を教える有効な手段である。もちろん実際に見たり乗ったりする体験にかなう理解はない。しかし、体験が難しいものや体験によっても理解できないものは世の中に多く存在し、その場合、絵本は子どもにとって最上の教科書になりうる。先入観の断ちがたさを思えば、初めて出会う情報には正確さが期待されるが、果たして教育目的の絵本で、どこまでそれが達成されているだろうか。

ワイルドスミスの『1 2 3』は、数の概念を的確に表現した絵本である。数は、経験による理解が難しいものの一つであり、日々の生活に広く浸透しているが苦手意識を抱く人が少なくないのは、そのためと推測される。『1 2 3』では数の本質が挿し絵によって視覚的に表現されており、数がどのようなものなのかが比較的容易に理解できる。

（数）は言葉で表現すると、「独立して、存在の認められる種類の物の集まりについて、多い少ないの程度または並んでいる順序を、精密にしかも物の種類によらず普遍的に表す基準となるもの」（三省堂新明解国語辞典四より）である。これをそのまま、初めて数を学ぶ子どもに聞かせたところで到底理解し得ないであろう。そこでよくあるのは、リンゴを2個描いて「2」だと教える方法である。これは間違いではないが数の理解というには不十分である。

『1 2 3』では、計算のための数だけではなく、「0」の意味や「1」の特殊性、数というもののあいまいさまでも視覚的に表現することに成功している。例えば、この絵本の「1」のページには、白い背景に「ひとつ」の円が描かれている。白は（無）を象徴する色であり「0」をも意味する。これに対してこの円は（存在）と「1」を表現をしていることに気付く。この絵からは、「1」という数が（存在）を意味する特別な数字であることが読み取れ、これはデジタル化の基本的考えである2進法を理解する上で重要な認識であるといえる。また、この「ひとつ」の円は「多数」の色と形を内包しており、「1」が「0.1」を「10」倍したものと「0.2」と「0.3」と「0.5」を合わせたものとも考えうることが表現されている。この考えは、様々な数式を解く上で便利ならば、四角四面の感がある「数」も、あいまいさや柔軟性を伴うことを示している。

少年時代には科学者の道を志し、数学の教鞭をとったこともあるワイルドスミスが描く『1 2 3』。絵が語るものの意味を説明しながらその意義について検証し、絵本の可能性の一つの頂点として、ワ



イルドスミスの絵本「1 2 3」を広く紹介する機会としたい。

●絵本の存在理由—絵本における絵の“動き”について考える—

【発表者】 増成隆士（筑波大学）

【趣旨】 絵本の存在理由は？ それを考えるために、“ミニマル絵本”を考えてみよう。これを、“ふたつの絵からなる2ページの絵本”として考えてみる。完全に同じふたつの絵による2ページの絵本には、本という複数ページ性の意味がなく、一方、まったく関連のないふたつの絵による2ページの絵本には、本としての統合性がない。共通の基盤の上でのある進行、動き、あるいは展開などが、本としての意味をなす。こうした「進行、動き、あるいは展開など」を併せて“動き”として捉えてみる。

“絵における動き”ということであれば、それを得意としているメディアとして映像がある。それに較べれば、絵本における絵の動きはきわめて制約されている。しかし、絵の自由自在な、速い動きが、ただちにその存在理由を意味するというわけではない。どういう意味を持つ動きであるかが問題である。

ここに“本”というメディアの特性がかかわってくる。本では、読者がみずからページをめくる。つまり、動きの一方の方向を読者が能動的につくる。単に「めくる速さ」という意味においてだけでなく、「絵本の世界に入ってゆく自分の意識を自分でアジャストしてゆく」という意味において。この点に「子ども・おとな」というファクターも重要なかわりをもつ。

人間の本質的存在様態を“世界—内—存在”と捉えたハイデガーの洞察は深い。それはやや静的に響く。人間は、ものごとをその“動き”（時間的、空間的、あるいは、意味的……）において捉え、体験として内化する存在である。この存在様態は、きわめて根本的であり、われわれの生のすべてにあまねく浸透しているために、われわれはむしろ、そのことをあらためて認識することがないままに多くのことが多い。われわれ自身が動きの多い行動をしたり、動きの多い事象を体験したりしているときはなおさらそうである。

これに対して、絵本における絵の静かな動きは、むしろ、本のページをわれわれがみずから能動的にめくるという意識のスタンスとあいまって、“人間はものごとをその動きにおいて捉える存在である”ということに意識を向けさせてくれる。こうした体験は、子どもにとっては、世界体験のひとつの練習という意味をもち、おとなにとっては、世界体験の“リセット”という意味を持ちうるのである。

●芸術で遊ぼう

～ブルーノ・ムナーリの造形ワークショップについて～

【発表者】 落合佐和子（武蔵野美術大学大学院視覚伝達デザインコース修了）

【要旨】 1907年に生まれ、昨年1998年までの一生のほとんどを創作活動に費やしたブルーノ・ムナーリ。ムナーリの作品を生み出す力・創造力は驚くべきものがありました。その創造力はどこから生まれて来るのだろうか？単純な興味からムナーリの造形活動とその周辺を調べ、武蔵野美術大学大学院在学中に「ブルーノ・ムナーリと20世紀芸術」と題する論文をまとめました。

ムナーリの作品はいずれも～芸術は難しいものではない、むしろ遊びにちかいです。とても楽しくて身近に必要なものなんだ。～と語っているようです。石の模様に何かを見出し、そこに簡単に絵を描き入れた作品「見立ての石」、それらをまとめ一冊の本にした「遠くから見ると島だった」といった作品があります。それらは誰にだってできることで、なんだか可愛らしく楽しいものです。～もっと創造を楽しもう、それは誰にだってできることなんだから～ムナーリのメッセージは「芸術の生活化・日常化」ということから発展して「生活の芸術化」という言葉でまとめることができるかもしれません。

ムナーリが60歳を越えて活動の中心としたのは、子供達と行う造形ワークショップ（ラボラトリオ）です。ムナーリがそれまでに蓄積してきた造形思想、経験などを子供達に分け与え、ムナーリも子供達の自由な発想に感化され、共に創造する場を作り上げていきます。いわばムナーリと子供たちとのコラボレーションといった時間だったのです。行為という創造活動であったと思います。現在、多くの美術館や公民館などで、造形ワークショップが開催されていますが、ムナーリはその草分け的存在と考えていいでしょう。

いくつかの代表的なラボラトリオの内容を紹介しながらムナーリが創造性というものをどのように捕えていたのか、子供と造形活動との関係などについて考えてみたいと思います。いくつかのテーマにそったムナーリの作品やラボラトリオの写真などもボードやスライドなどで紹介しながら進行する予定です。

ムナーリは子供たちや大人たちにこう語りかけているように思います。～芸術で遊ぼう。きっと沢山の発見がある。そこから何か素晴らしいものが生まれてくるんじゃないかな？～

【ラウンドテーブル分科会】6月20日 13:00～15:00

●ラウンドテーブル1

絵本作家研究Ⅱ ブルーノ・ムナーリ

話題提供者 岩崎 清 (こどもの城)

コーディネーター 松岡希代子 (板橋区立美術館)

広松由希子 (ちひろ美術館)

まず参加者全員に21個の黒い点が描かれた同じ紙を配布し、2点ずつを曲線で自由に結んでもらった。一枚ずつ表情の異なる紙が並んだ。これはムナーリの絵本の一冊『空想の旅』を基にした小さなワークショップの試みである。

ムナーリの絵本には、いわゆる作者と読者の関係、送り手と受け手、表現者と鑑賞者というような対立的な関係は存在しない。この分科会では、ムナーリの柔軟な精神の一端を受け継ぎ、話し手と聞き手という垣根を取り払い全員が参加者となって、ムナーリの絵本を体感し意見を交わすことをねらいとした。

1945年に敗戦国イタリアに誕生した『ムナーリの本』シリーズ(全10冊。うち1冊は未刊)から見ていった。大きさのちがうページが綴じられていたり、幾重ものフラップがついていたり、それぞれ造本上の違った工夫が施されている。派手なポップアップ絵本とは違い、「めくる」行為そのものが物語の展開に密着した、仕掛け絵本の原型を実感した。『きりの中のサーカス』をはじめ、『赤・緑・黄・青・白頭巾ちゃん』、『本に出会う前の本』『読めない本』『おはなしのおはなし』……技法、素材、表現、様々な面から新しい試みを続けた彼の絵本を見ていく中で、「ムナーリの絵本は“試作品”のように感じられる」という発言が引き金となり、さらに活発な議論となった。「彼の絵本は発想を援助する“きっかけ”を提示し、読者との関わりの中で完成する」「作り手として子どもに“与える”絵本ではなく、子どもから“引き出す”ことを意図する絵本」等の意見が相次いだ。

また「ムナーリは、絵本作家として、あるいは彫刻家や建築家としてではなく、アートを軸にしてそれぞれの媒体に関わった」という視点からも、話は絵本からワークショップや生活を豊かにするオブジェ、トータルな表現者としてのムナーリにまで広がった。

個々に秘めていたムナーリへの熱いオマージュも発露し、刺激的なラウンドテーブルとなったと思う。焦点を定めて議論を掘り下げることができなかったが、今後それぞれがムナーリについて考えていくための“きっかけ”となれば幸いである。(広松由希子)

ラウンドテーブル1 写真左から岩崎・広松・松岡氏



●ラウンドテーブル2

絵本と地域活動Ⅱ「絵本で広げようこどもの世界」

話題提供者 高井進(大島町絵本館館長)

高野京子(ブー横丁子ども研究所代表)

濱東篤子(たんぼぼ文庫主宰)

コーディネーター 千田篤(絵本研究者)

絵本と地域活動パート2は、パート1の東京という地域から、富山・石川という地域に舞台を移し、3名の話者提供者に活動報告をしていただきました。

冒頭に、コーディネーター、話者提供、記者が、好きな絵本を各2冊ずつ紹介し、各自の絵本への思いを語ってもらいました。高井氏は、絵本館のグローバルな活動の中で、常に、富山という地域を意識しているということ、また、一人ひとりの子どもの個性を大切にサービスを提供していることを話されました。特に、絵の持つ力についてふれられ、表現者としての子供達を、絵本を通して、豊かに育てていきたいと語られました。

高井氏は、母親として絵本に出会い、そのことが今、『ブー横丁』という児童専門書店を支える一人であることにつながってきているということをお話されました。地域の中で、大人も子どもも元気に育つ環境を作っていくために、何が出来るかを考えながら『ブー横丁』の運営に携わってられます。

濱東氏は、金沢氏で主宰している、たんぼぼ文庫の活動を具体的に報告して下さいました。お母さんたちに絵本を紹介することで、子供達のところにはしっかりと届いていること、力のある絵本がだんだん見えてくるということ、「くまのコールテンくん」と「どろんこハリ」の、人に読んでもらうことによって、新しいことに気づかされるというエピソードなど、文庫での活動のほかにも小学校での2、3人の子供を対象とした本の朗読サービスの活動報告もありました。最後に千田氏が、絵本が好きという気持ちが、手掛かりとなって、様々な活動に結びついていることがよくわかった、そして、其れを楽しんでいることが絵本ならではのものではないか、とまとめられました。

活動報告は、富山、石川といった地域性の高いものでしたが、人と本を結びつけるものに地域差はありません。絵本学会の今後の活動の中から、幅広い情報交換がますます活発に行われることが期待できる分科会でした。(堀 幸子)

●ラウンドテーブル3

絵本と造形表現Ⅰ - 絵本とアニメーション -

話題提供者 米徳信一 (武蔵野美術大学)

コーディネーター 今井良朗 (武蔵野美術大学)

生まれる前の<声>にならない物語性は、メディアの方法に順ずることで私達のまえに姿をあらわします。それは表現の体験として私達の記憶に<あるイメージ>として焼きつこうとします。もしそれがありきたりの表現であったなら、それはほどなく忘れ去られるでしょう。

しかし「あの絵本は何回も読んだ」「子供のころお気に入りだった」「全部覚えてないけどあのシーンは忘れない」という時、そこには強烈な表現体験があったことを意味します。そこには<イメージの生



ラウンドテーブル4の会場風景

成>が行われたのです。

ラウンドテーブル3ではこのイメージの生成をテーマに絵本とアニメーションの表現比較について考えてみました。それは絵本として存在している物語性とアニメーションへの変換が行われた学生作品の物語性とを参加者の皆さんと比較することで始まりました。原作の絵本は著名な作品ばかりでしたので、すぐに原作とアニメーションとのイメージのずれを指摘する意見が出されましたが、ずれの根源にたどり着く前に話題が技術的な問題に集中してしまいました。学生仕事による完成度の問題に眼をつぶって議論することには多少無理があったようです。本来の比較を有意義に行うとすれば少なくとも技術的ストレスのないものが条件であり、まずメディアとしての成立が問われるのは当然のことです。

メディアの変換は表現の世界では珍しくありませんが、成功した例は必ずしも原作に忠実とは限りません。そのメディアに変換することで生じるであろう新たなイメージの生成が考慮されなければならないからです。原作のメディアが持つ強いイメージに対して表面上の置き換えだけでは新たなイメージを創造することは難しいでしょう。イメージがずれることを恐れた消極的な発想は原作のトレースでしかありません。原作を学生がどう読み取り、創造の視点がどこを向いていたのか、そして参加者の皆さんがそれをどう受け止めるのかということが話題の中心としたかったのですが、先の条件をクリアすることが次回の課題となったようです。しかし物理的な時間軸を持った動画表現や音響表現は平面表現とは明らかに異なるアプローチを可能にするということは確認できたとともに、表現形態の比較から何を読み取っていくべきかという問題提起はできたかと思われまます。当日は制作をした学生2名も同席し、貴重な意見や感想を直接いただくことができました。この場をお借りして参加してくださった皆様に御礼申し上げます。(米徳信一)

●ラウンドテーブル4

絵本と表現Ⅱ

「立山曼荼羅の絵解きを通じて絵本を考える」

話題提供者 福江 充 (立山博物館)

坂森 幹浩 (売薬資料館)

コーディネーター 米原 寛 (立山博物館 館長)

「絵本」の特性は、まず、第一に視覚（絵画）と聴覚（語り）の両方で伝達するものである。さらに、第二に、語りの部分は、語り手の技量（話術・話法）によって情報の質・量に変化する。また、第三に、時代の流れによる聞き手の変化に合わせて、伝えたい情報のウエイトに変化が生ずること等である。この三点をまとめていうと、絵本・立山曼荼羅・売薬版画に共通していえることは、「創り手と読み手の両者が相まって初めて成立する」ものである。即ち、「絵本」は、創り手の意図を解した読み手（多くの場合母親）が聞き手（多くの場合子供）に、絵や作者の意図に則しながらも一方では自分の生活・人生体験で感得したことを伝えるのである。一方、「立山曼荼羅」は、立山信仰の内容をビジュアルにかつ端的に表現した一枚のPR絵画である。また「曼荼羅」は、一枚の絵画なるが故に、伝えたい内容をすべて盛り込むことは物理的に無理であるし、仮にすべてを盛り込むと、多様化した対象、時代とともに変化する対象に対応できない。従って伝えたい内容の基本のみ描き込み、絵解きに当たって、語り手（話者）が、対象のニーズに応えながらも自在に話を操る話術で伝えたい内容（情報）を定着させるのである。また「売薬版画」についても、多くの場合、版画を媒介に語りを伴う場合が多い。訳者芝居絵などは描かれていない浄瑠璃を伴奏に芝居絵をみながら芝居の話をするので語り手と聞き手が一体となる。歴史絵・伝説絵等も同様である。

絵本に「曼荼羅絵解き」の話法や「売薬版画」の空間背景の手法を加味すると、さらに絵本のもつイメージ性を高めることができよう。(米原 寛)

心のふるさと 安曇野

安曇野ちひろ美術館 学芸部長・事務長 竹迫 祐子

はじめに

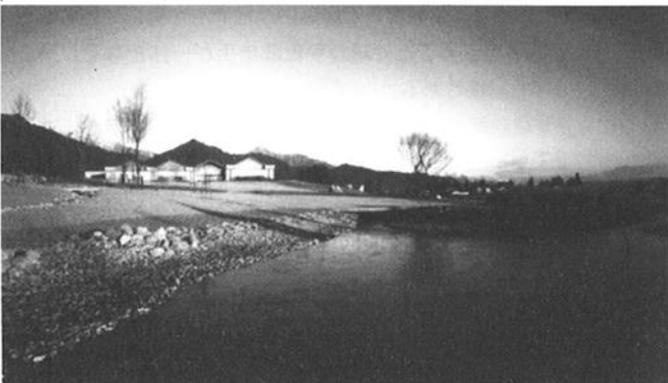
1997年4月19日、ちひろ美術館(東京)の20周年を記念して、安曇野ちひろ美術館は生まれました。

ちひろが22年間を過ごした東京都練馬の自宅あとに、1977年に建てたちひろ美術館(東京)は、「まるで、ちひろさんの家に遊びに来たような気がする」と言われる雰囲気大切にしながら運営してきました。自宅跡のささやかな美術館スペースでは、必ずしも十分な活動ができたわけではありませんが、いわさきちひろと世界の絵本の原画展、子どもも大人も楽しめる幅広い分野の企画展を重ねてきました。その間に収集された作品は、ちひろ作品8500点に加え、世界の絵本画家の作品9200点にのぼります。これらの作品が、常時、展示紹介される空間をとの声に応じて、安曇野ちひろ美術館は誕生しました。

心のふるさと——安曇野

安曇野と言えば、日本でもよく知られた観光地。信濃富士と呼ばれる有明山の麓に位置するここ松川村は、信州生まれのちひろの両親が、戦後開拓に入った村であり、ちひろも折りに触れては訪れ、多くのスケッチを残した土地でもありました。いつも変わらぬ雄姿をたたえる北アルプスの山々。その山ふところに抱かれた安曇野は、北アルプスの雪解け水をいただく静謐な川の流れに恵まれて広がる水田地帯で、豊饒の里と呼ばれるにふさわしいところです。それは、ちひろの心の原風景であるとともに、多くの日本人が心に描く「ふるさと」の原風景とも言えるでしょう。

およそ一万坪の安曇野ちひろ公園(松川村営)に囲まれた安曇野ちひろ美術館は、何よりも、美しい安曇野の風景と豊かな自然を楽しんでもらうための美術館として計画されました。そこに身を置き、ゆったりと心をつつろがせ、好きな美術との出会いを楽しんで欲しいと考えました。そのために、入館券をクリップとし、一度入館するとその日は一日自由に出入りできるスタイルをとりました。美術館で絵を見た後、近くの畦道を散策したり、お蕎麦を食べに行った



安曇野ちひろ美術館 外観

り、時には近くの温泉につかたりして、また、美術館でひとときを過ごすことができます。リラクゼーションを目的とした、日本ではまだ少ない公園型の美術館です。

館内には、「いわさきちひろ」"世界の絵本画家" "絵本とイラストレーションの歴史"の3つの展示室があり、年4回の会期で展示を行なっている他、「絵本の部屋(絵本図書室)」「子供の部屋(幼い子どもたちの小さな遊び空間)」そして「公開資料室(申し込み制の絵本資料の研究室)」等々があります。

展示室1——いわさきちひろ

いわさきちひろが画家として本格的に活動を開始したのは1946年。1974年に亡くなるまで、終生子どもを描きつづけ、主として絵本の世界で活躍しました。ここでは、初期の素描、スケッチ、油彩から、後期の代表作、絵本原画にいたるまで、およそ80点の作品と関連資料を展示し、ちひろの画業の全体像を紹介するとともに、「世界中の子どもみんなに平和としあわせを」と願ったちひろの心を伝えています。



展示室

展示室2——世界の絵本画家

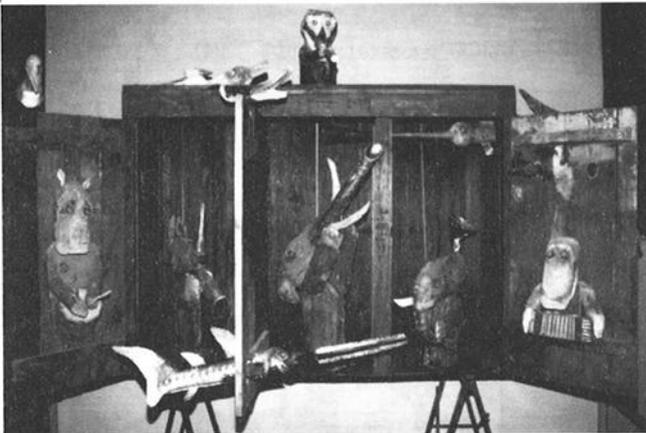
現在、当館では、日本の大正時代の童画家岡本帰一、武井武雄、初山滋をはじめ、アメリカのモーリス・センダック、アーノルド・ローベル、イギリスのブライアン・ワイルドスマスやジョン・バーニングム、ドイツのピネッテ・シュレーダー、フランスのジャン・クラブリュイ等々、世界18ヶ国121人の画家、9200点の作品を収蔵しています。中でも、チェコのクヴィエタ・パツォウスカー、ポーランドのユゼフ・ヴィルコン、絵本『てぶくろ』で知られるロシアのE. M. ラチョフ等々、東欧・ロシアの絵本画家は、極めて質の高いものが多く、当館コレクションでも重要な位置を占めています。また、先ごろ開催した「現代中国絵本画家展」を機に、中国の絵本画家の作品が加わり、コレクションにさらなる巾と膨らみを持たせました。旧来、絵本のイラストレーションは、洋の東西を問わず美術として

の価値が理解されず、その原画は美術品としての扱いを受けてきませんでした。こうした状況の中で、散逸した作品も少なくありません。優れた絵本のイラストレーションを、美術として位置付け、作品の保存を考慮に入れつつ、公開、研究を進めていくことは、ちひろ美術館の大きな役割と考えています。

こうした考えが理解され、さまざまな作品の寄託や寄贈が進んでいます。昨年は、絵本『スーホの白い馬』で知られる日本を代表する絵本画家、故赤羽末吉氏の全作品、絵本原画から、タブロー、スケッチ、制作メモ、絵本のダミーに至るまで、計6000余点が遺族より寄贈されました。このようなまとまった作品群は、画家研究、絵本研究の大きな弾みになると期待されます。

展示室3——絵本とイラストレーションの歴史

今日、私たちが日常的に親しんでいる絵本も、そのルーツを辿ると、遙か紀元前の壁画にまでさかのぼるという人もいます。そこまでさかのぼることは難しくとも、この展示室に展示された、紀元前2世紀、パピルスに描かれた古代エジプトの「死者の書」(1890年・大英博物館による複製)をはじめ、仏教の日本渡来の時期に登場する日本最古の絵巻「過去現在絵因果経」(大正期・芸大本からの複製)や、中世ヨーロッパの手描きの時祷書(15世紀・端本)、さらには、日本の江戸期の絵巻や版本などからは、現代の絵本の原形、ルーツが思い浮かべられます。ここでは、こうした資料や19世紀から20世紀初頭にヨーロッパを中心とした生まれた稀覯書を展示、絵本と紙に描かれたイラストレーションの歴史を紹介しています。



ユゼフ・ヴィルコン作品「動物の音楽隊」1995年

公開資料室

まだまだ、整理が行き届かず、不十分ではありますが、コレクション作家を中心とした各国の原書絵本等の資料と、絵本とイラストレーションの歴史展示に関連した古い絵本や貴重資料を収集、研究の希望に応じて公開する場として、公開資料室を設けています。現在は、資料整理中のため、未だ機能しきってはいませんが、2001年の新館オープン時を目指して、現在、整備充実に努めています。

2001年新館誕生

2001年、安曇野ちひろ美術館はより一層の活動充実に期して、増築オープンします。生まれる新館は、“世界の絵本画家展示室”“企画展示室”“絵本とイラストレーションの歴史展示室”の他、講演やコンサート等にも活用できる空間を加え、“絵本館”として独立して生まれます。それに伴い、現在の建物は“ちひろ館”としてまとめ、従来のちひろの作品展示室に加え、折々の写真、資料やゆ

かりの品々を展示し、いわさきちひろのひとと人生を紹介する展示室が新たに登場します。

おわりに

今日、優れた絵本のイラストレーションについては、「絵本は子どものもの」という古い既成概念を越えて、大人も子どもも楽しめる芸術であり、人が人生の最初に出会う美術であるという認識が徐々に広まってきました。絵本学会が誕生し、美術大学では絵本の製作や研究を取り上げる動きが生まれてきました。現在、全国には20館余りの絵本美術館が誕生して、それぞれに個性豊かな活動を展開しています。安曇野ちひろ美術館は、こうしたさまざまな絵本研究の拠点のひとつとして、これからも幅広い活動交流、合同企画展、共同研究等々を進めて行きたいと思っております。そして、何より、「ここに来るとほっとする」、そう言われる場でありつづけたいと思っております。

■インフォメーション

安曇野ちひろ美術館／CHIRO ART MUSEUM AZUMINO

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原

TEL.0261-62-0777

(テレホンガイド) 0261-62-0772 (お問い合わせ)

開館期間 …3月1日～11月30日

開館時間 …午前9時～午後5時(GW、8月は午後6時まで)

休館日………水曜日(祝日は開館、翌日休館)

展示替えのための臨時休館

冬期休館12月1日～2月末/GW、8月は無休

入館料………大人800円/中、高校生500円/小学生300円

65歳以上の方、障害者手帳をお持ちの方、介護添えの方、20名以上団体は100円引きの割引制度あり

■現在の展示(1999年7月16日～10月5日)

「ちひろの夏」

企画展「ユゼフ・ヴィルコン展」

■次回展示予定(1999年10月8日～11月30日)

「ちひろの秋——アンデルセンの世界——」

特別企画展「1990年代の日本の絵本展」

交通のご案内

●車の場合

長野自動車道「豊科」I.C.より約30分

東京方面(中央自動車道)——(長野自動車道)——松本I.C.——豊科I.C.——(北アルプス/シラネ道路)——国道147号線——安曇野ちひろ美術館

名古屋方面(中央自動車道)——(北アルプス/シラネ道路)——国道147号線——安曇野ちひろ美術館

新潟(糸魚川)方面——(国道148号線)・(国道147号線)——安曇野ちひろ美術館

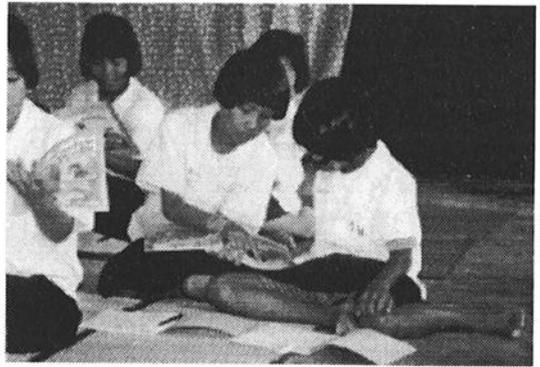


本のない世界の子どもたち —— タイの図書館活動

バンコク子ども図書館ボランティア 竹内由子

日本人として日本で育った人で、生まれてからまったく「本」というものを目にしたことがない人は、まずいないでしょう。しかし、ここタイの貧しい県では、そんな人のいる村がたくさんあるのです。タイの農村部では、本屋や図書館が無いのはもちろん、身のまわりに、絵本、図鑑、まんが本はおろか、新聞、雑誌すらありません。教科書でさえ、普及率は半分以下。教室に一冊だけある教科書を先生が音読し、生徒はそれを聴いているだけという授業も珍しくありません。

そんな状況にある村の子どもたちに、読書の楽しみを知ってもらおうと、たいへんな努力をしているのが、国立コンケン大学移動図書館の先生たちです。現在タイの専属職員が6名。彼女たちは図書館学科や教育学部の出身で、たくさんの志願者の中から選ばれた優秀な方々。アドリブでもかるく半日は子どもたちをひきつけられる授業ができるそうです。この活動はタイのNGOの一つなので、昨今の不況で資金難に陥り、人件費、つまり先生たちの給料が確保できないのではないかという危機に何度かみまわれてきました。それを懸命に支えてこられたのが、アジアこども教育センター主宰の杉浦直樹氏です。直接お話を伺う機会もありましたし、またタイの邦字新聞「バンコク週報」に「移動図書館日記」を連載され、活動をくわしく知ることができます。



(移動図書館活動より)

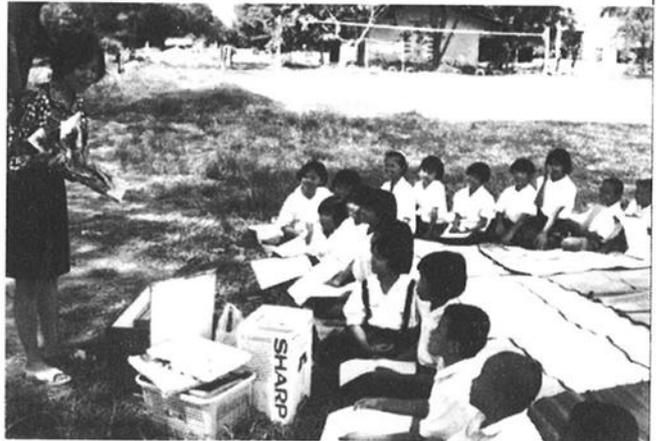
では、「移動図書館」から、その授業風景を少しのぞかせてもらいましょう。先生が、絵本を取り出して、子どもたちに言います。

・・・「左手はどちらかな、左手を上」

子どもたちはさっと左手をあげる。

「左手でこうして本の背中をもって。そう、それでは右手はどっち？右手でページの右肩を一枚ずつこうやってつまみ、しわにならないように、やぶれないよう、ゆっくりとめくる。ひらいた本の背を左手で下からささえるようにもって、右手の人差し指をページの右肩の下側に入れて、すうーっと下のほうへおろします。そして人差し指と親指でページをやさしくはさんで、ゆっくりめくる。いいですか」

子どもたちは必死になってまねしている。・・・



校庭で先生が読みかせをします。(移動図書館活動より)

本の無い村の子どもたちは、まずこうして本のページのめくり方から教わります。この段階の子どもたちは、たとえばぬり絵も、きちんと色わけしてぬることができません。一色でぬりつぶしてしまいます。小学校の上級生でも絵本が読みこなせません。字が読めても文章としてのまとまりがわからないので、つまらなく、読書の時間も15分が限界。しかし先生たちは、歌やゲームや読み聞かせをおりまぜて、活発な雰囲気をつくります。そんな子どもたちがやがて本をおもしろいと思い、自分で読みたい本を選びとることができるようになるまで、月二回の巡回を続けること一年半。ここに至ってやっと、移動図書館はその学校に図書室を作り、図書を寄贈し、その学校への巡回を終了します。つまり、いきなり本や図書館をばんと送っても、それでは誰も使いこなせないのです。必要なのは、あ



本を選びます。1期2年で約12校巡回するので貴重な図書は貸出しはできません。(移動図書館活動より)



読書ノートも支給してもらって自由に読書します。最初は本の題をうつすだけでせいっぱいの子も。(移動図書館活動より)

たたかい、忍耐強い、責任感ある導き手と、時間なのです。

しかし、このことは、あふれる活字にとりかこまれている日本の子どもたちにもあてはまるのではないのでしょうか。いくら絵本や図書館がぼんとおかれていても、導いてくれる人がいないとそのおもしろさはわからない。しかし、日本で幸運なのは、その導き手に、両親をはじめ、身近な年長者がすぐなれる能力をもっているということです。タイでは、大人たちが、本を読んだことがなく、字も読めない人もいます。

日本人はまた、そんな導き手になりたいという発想をもつこともできます。このバンコクで、そんな日本人主婦たちが、約60名集まって、4年前に当地で育つ日本人の子ども達のために、子ども図書館を作ったのです。なにしろ首都バンコクにさえ、国立図書館のほかは、市民の気楽に利用できる図書館はありません。現在この子ども図書館は、日本人会の資金援助により、蔵書約7000冊、登録世帯数約1400家族となり、日本人親子の憩いのばとなつています。図書はの整備、カウンター業務、図書館だより、おはなし会、すべて主婦ボランティアの手で運営されています。今年はいくまでの業績が認められ、日本人学校(生徒数約1800人)の社会科資料集に載って、公民館についての授業に使われたり、タイの雑誌に載ったりしました。また、タイは、昨年より、読書教育十年計画が開始されましたが、今年はいくは文部省主催のブックフェアで、ワークショップをするよう依頼されています。先日のおはなし会には、先の移動図書館の先生に来ていただいて、日タイ両語で楽しい集いをもちました。こうして日本の子どもたちや、タイの方々喜んでいただくたび、それができるだけの教育を自分は受けてきたのだと覚られ、感慨を得ます。日本にずっと居れば見えてこなかったことだったでしょう。絵本を楽しむこと、その楽しみをほかの人に伝えることができるということ、それはたいしたことなのだとすることを、たとえば毎日をつまらなく思っている日本の若い人にもっと伝えなければならぬのではないのでしょうか。

大阪府豊中市より発信

絵本の輪が大きく大きくなりますようお願いを込めて、'70年万博の地、大阪国際児童文学館に隣接する小さな市よりNEWSをお知らせいたします。

於：岡町図書館：“お話ボランティア養成講座”受講修了生による絵本読み聞かせが小学校、各地域図書館・分館で月1回行われています。身近に絵本に親しみ、楽しむことで豊かな心が育まれ子どもたちとのコミュニケーションも回を重ねるごとに深まっています。絵本を通して図書館と地域社会の交流へと発展していくよう期待しています。

於：服部図書館：“開館記念行事の中の一つ”“どんどん広がる絵をかこう！”豊中子ども文庫連絡会と図書館主催。講師 絵本画家 秋野亥左氏のお話の後、子どもたちは大きな白い布にタイトル通りのびのびと自由に元気いっぱい絵筆で遊び、どの顔も満足気。素敵なお話もできあがり楽しいひとときを過ごしました。(林 光子)



絵本は小さな美術館

～素話サークル・はなしのこべや～

「無理なく自然体でできる。そして何よりも自分が楽しい。」誰もが口を揃えてこう答えたこの会は、もともと図書館の司書さんのお手伝いとして始まった団体。もう16年も栃木県南部を中心に活動している素話を中心としたサークルで、通称、『はなしのこべや』と呼ばれている。毎月一回、図書館などで『おはなしかい』を開催し、素話や絵本の読み聞かせを通して、子供達に、本や物語の素晴らしさと感動を伝えている。実は、私自身、小さい頃、この『はなしのこべや』のお話を聞いて大きくなったのだ。鈴の音がなり、おはなしの蠟燭に火をともし。見慣れたはずの部屋はたちまち不思議な世界に姿を変えて、その中で繰り広げられる様々な物語。絵本が始まると、その絵の楽しさに早く次のページをめくりたくなる衝動に駆られたことを覚えている。おはなしが終わると、蠟燭を消すのだが、吹き消す人は、その月にお誕生日のある、会場にきている子供達。「火が消えるときには願い事をするのよ。」と、さっきおはなしをしてくれたおばさんが教えてくれる。30分のファンタジーだ。メンバーに会の感想を聞いてみた。「全部が楽しい。だってこの私自身、楽しんじゃってるのよ。」「何が楽しいかって、お話が終わった瞬間、子供達が一斉にわっと寄ってきて、おもしろかったあ、もっと聴きたい、と言ってくれるときね。」「絵本がすばらしいものばかりね。美術館にいかなくても素晴らしい絵が毎日でも見られるのよ。」などなど。おはなしかいでは、素話を主とし、絵本はそれに付随するかたちとなっているが、扱う絵本は個人に任されている。

よく扱う絵本はトミー・ウンゲラーやレオ・レオーニ、ポール・ガルドン、日本人では赤羽末吉、スズキコージなど、大胆に絵を描く作家が多い。どんなに好きな絵本でも、読み聞かせにむかない絵本は選ばないと言う。その点における彼女たちの目はシビアである。どんなに絵が綺麗でも、細かすぎるものや色の薄いものは、遠くから子供達に見えないから駄目だと言う。常に子供達の立場に立つことを忘れていない。現在は四十代の主婦が中心の小規模な団体ではあるが、その活動内容は幅広く、毎月の定例会の他にも、地域の小学校や生涯学習の一環としてなど、多くの団体から『おはなしかい』の依頼を受け、様々の場所で公演活動を行っている。子育て中に、絵本を読む楽しさを覚え、子育ての一環として始めた人が多い。勉強会などで、じっくり本を読んだり、おはなしを聞くと、わかっていたはずなのに、ここにこんな絵があったのか、などの新たな絵の発見や、新しい感動など、気づくことが沢山あるという。毎日毎日が万事この調子だから、退屈や辞めることなんて、とても考えられないそうだ。(宗川 七恵)



デジタル絵本製作の活動をご紹介します

作者：奥村律子さんは、自分の子供のために、動く絵本を製作し、HP上で公開されていました。その作品は、自由国民社のホームページ絵本大賞を昨年受賞。(今年は、優秀賞を受賞しました。)

記念に紙の絵本が出版されましたが、それを見て、少々ガッカリ。彼女の作品は動いてこそ素晴らしいと再認識しました。それで、友人たちとインターネットにつなげない人にも見てもらえるように、CD-ROM 絵本を自費出版いたしました。

今の若い母親の大半は、絵本は買わず、絵本に興味をもっている人でも図書館で借りて子供に与えています。今や、絵本は、幼稚園や保育園で先生が読んでくれるもの、或いは図書館で読み聞かせのおばさんが読んでくれるものというものになりつつあります。

この絵本学会に参加されている方の多くは、絵本作家をめざしていらっしゃるったり、グラフィックの御仕事につかわれていたり、絵本をアカデミックに研究されていたりします。昔は絵本を購入する人は、底辺が普通のお母さんたちで、その上に学校や図書館などがあり、その上に、そういう学問やお仕事関連、マニアの方、という風にトライアングル構造だったと思うのです。が、今それが、逆三角形構造になっているように思います。絵本は売れず、絵本ショップの方々も嘆かれています。

子供の興味はデジタル機器にむけられています。

絵本を後世にも長く伝えていくには、紙というメディアにこだわらないことだと思うのです。パソコン上で再生するデジタル絵本でも、十分あたたかさは表現できます。

紙の絵本にこだわりがあればあるほど、デジタル絵本に抵抗、難色を示されます。そういう方々にも受け入れていただけるよう、温かみのあるデジタル絵本を製作していけたらと思います。どうぞ、一度、ホームページをご覧ください。(筏井美奈)

「ぞうくんのCD-ROM 絵本」<http://www.dearm.co.jp/zoo/info.html>

伝言板

●都民カレッジ 1999年度開講のご案内

『絵本紀行ードイツ・スイス・オーストリアー』

講師：川西美沙（ドイツ児童文学者）

会期：1999年10月～12月

月曜日・10回 15:00～16:30

10/11・18・25 11/8・15・22・29 12/6・13・20

受講費：13,000円

場所：丸の内東京国際フォーラム

申し込み期間：8月18日～9月17日

申し込み方法：丸の内キャンパス東京国際フォーラム(03-3215-4321)に電話予約。

絵本に由緒ある地を巡りながら、ドイツ・スイス・オーストリアの古典絵本、及び現代の絵本についての知識を深めるのが狙いです。

絵本が生まれた時代背景や風土等にも目配りをして絵本の歴史を辿り、芸術様式との関係も探りたいと考えています。例えば、ウィーンでは優雅なコーゲントシュティル(アールヌーボー)時代の絵本、スイスのトルンでは、仮ジェの風土色豊かな絵本、フランクフルトではホフマンの古典絵本「もじゃもじゃペーター」、ミュンヘンでは仕掛け絵本の祖といわれるメグゲンドルファーの絵本や現代絵本作家シュレーダーの絵本、ハーナウ、カッセルではグリムにちなんで昔話の絵本についてなど、現代の新しい絵本の傾向も視野に入れます。(川西美沙)

●絵本を探しています。

これは子供の頃、家にあったのですが、くちゃくちゃにしまって、今はありません。"CRAZY COWBOY (クレイジー・カウボーイ)" Guillermo Mordillo作・画1972アメリカEmme社です。その1作目にThe Dump and Daffy Doings of a Daring Pirate Ship(海賊船)というのが出ているらしいのです。

この絵本に関する情報やモルディロに関する情報を知っている方、教えて下さい。(松山彩乃)

●JBBY日本国際児童図書評議会

《ハロー・ディア・エネミー！展》～平和と寛容の絵本展～

この「ハロー・ディア・エネミー！」展は、平和と寛容の精神をテーマに世界中から集められた絵本の展覧会です。JBBYでは、この絵本展を日本の子どもたち、保護者や先生、図書館やメディア関係の方など、一人でも多くの方々に見ていただき、「心をそだてる」ことが日常的な関心ごとになっていくことを願い、日本への招喚実現いたしました。下記の要綱で展示開催して下さる方を募っております。

対象：学校図書館資料館など、展示会場を所有する団体

展示内容：絵本45タイトル(図書リストをご希望の方はJBBY事務局まで)・本から引用したパネル30点・ポスターやテキスト数点

開催条件：期間=7日～14日(搬入搬出日を含まず)

企画料=7万円+返送の際の運搬費実費(期間予算等はご相談下さい)

開催期間：1999年6月以降のご希望の日

主催：JBBY日本国際児童図書評議会

企画：ドイツ・ミュンヘン国際青少年図書館

その他：絵本展開催中に子供の本に関する講演会をご希望の場合、講師を紹介できます。ご相談下さい。

●お問い合わせ●東京都新宿区袋町25-30-203 TEL:03-5228-0051 FAX:03-5228-0053 e-mail:JDK03301@nifty.ne.jp
JBBY日本国際児童図書評議会

●桐生市 第1回手づくり布の絵本全国コンクール募集

「布地は 母親の肌につく 第2の出会い」

応募内容

・応募資格 不問

・応募規定

1.一人・一団体3作品以内とします。

2.布を素材とした絵本であり、あくまでもオリジナルな手作り絵本であることとします。

3.大きさは自由です。ただし、表紙をつけ、本の体裁を整え、多くの人々の鑑賞等に耐えうる作品にして下さい。

4.既に布を題材とした絵本コンクール・手芸コンクール等の出品物や出版物を模倣して応募する場合は、予め製作者・原作者(著作者)の許可を得て応募するようにして下さい。著作権法を十分認識して応募するようお願いいたします。

・募集期間 1999.9.1～9.30当日必着

・応募方法 所定の応募票を返信用の切手を同封の上「応募票請求先」へ請求して下さい。

・審査方法 主催者の委嘱した審査委員の審査及び作品展示期間の入館者一人一票により入賞作品を選考します。

・応募作品の展示・来館者による投票期間

1999.11.10～11.14

・展示会場 桐生市織姫町2-5 桐生市市民会館 地下展示室

・結果通知 審査終了後、入賞者宛に通知します。

・その他、賞・応募作品の取扱等についてはお問い合わせ下さい。

●応募票請求先・作品送付先・お問い合わせ先●

〒376-0022 群馬県桐生市稲荷町6-2 桐生市立図書館内
布の絵本実行委員会

TEL:0277-47-4341 FAX:0277-40-1070

◎絵本関係展覧会・イベント

●安曇野ちひろ美術館

《ちひろの夏～自伝『わたしのえほん』展～》

会期：1999.7.16～10.5

夏は子どもたちが輝く季節。夏休みに入れば、朝のラジオ体操から夜の線香花火まで、子どもたちにはまるごと自分の時間です。今回は、太陽の日差しを浴びて輝く、夏の子どもたちを描いた作品を展示します。

※主な展示作品※ ひまわりとあかちゃん(1972年) 帽子の少女(1971年) 黄色い帽子の少年(1971年) 絵本「ことりのくるひ」(ポローニャ国際児童図書展グラフィック賞受賞)より「小鳥と少女」他約60点

企画展 《ユゼフ・ヴィルコンの動物たち》



ユゼフ・ヴィルコン「ブラウンさんのねこ」
表紙習作 1987年

会期：1999.7.16～10.5
開館以来、館内に展示され人気を集めている「動物の音楽隊」(1995)、「魚」(1993～1995)などのオブジェを制作した、ポーランドの絵本画家ユゼフ・ヴィルコン。今回の企画点では、動物画の第一人者として国際的に知られるヴィルコンの初期の作品から現在までの動物を主人公にした絵本の原画や習作を展示します。また新作のオブジェ「Music Instrument」

(1999)も初公開します。

同時開催 《世界の絵本画家》

※主な展示作品※ ●エリック・カール(アメリカ)『ぼくのねこみなかった?』のイメージ(1972) ●クヴィエタ・パツオウスカー(チェコ)『すずの兵隊』(1985) ●ジャン・クラヴリイ(フランス)『おまる』(1990) ●E.M.ラチョフ(ロシア)『マーシャとくま』(1965)

《おはなしの会》9:30～ 幼児室にて

《ギャラリートーク》14:00～ 展示室にて

「おはなしの会」では、当館司書が子どもたちにむけた絵本の読み聞かせを(大人の方の参加も歓迎)、ギャラリートークでは、開催中の展示について、展示担当学芸員がわかりやすく解説する。

【開館】9:00～17:00(G.W.・8月は18:00まで)

【休館日】水曜日(祝日は開館、翌日休館) G.W.・8月は無休
9/16・10/7・11/4(各木曜)は臨時休館日

【入館料】大人800円・中学生500円・小学生300円
(20名以上の団体は100円引き)

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原

TEL:0261-62-0773 FAX:0261-62-0774

HOME PAGE: <http://shinshu.online.co.jp/museum/chihiro/chihiro.htm>

●ちひろ美術館

《ちひろとルイ子展》

フォトジャーナリスト

吉田ルイ子ガ選ぶ

1999.7.15～10.3

20世紀、それは戦争の世紀だった。戦争、差別、貧困、環境破壊などで、おおくの小さな命が犠牲となった現実を世界各地で私は見た。と同時に、レンズの向こうの子どもたちの瞳に、大人のうそを見抜くしたたかさを感じた。ちひろさんの絵



吉田ルイ子 USA ハーレム 1964年

は、愛くるしく美しい。が、彼女の描く子どもたちの瞳は真正面をみすえ、決して社会にこびない厳しさを秘めている。彼女自身、弱い立場に置かれた子どもたちの苦しみ、痛みを共感できる女だからだろう。彼女の絵は自分の鏡だったのだ。写真も自分の鏡だと私は信じている。この展示を通して、「平和を21世紀へ」の祈りを、みなさんと共有することができれば嬉しく思います。

吉田ルイ子・・・北海道生まれ。慶応義塾大学卒。NHK国際局、朝日放送アナウンサーを経て、フリーのフォトジャーナリストとして活躍。1989年JCJ特別賞受賞。

【開館】10:00～17:00(金曜日は19:00まで)

【休館日】月曜日(祝日は会館、翌日休館) / 年末年始(12月28日～1月4日am)

冬期休館・・・1月17日～2月10日

【入場料】大人500円・中学生200円・小学生100円

20名以上の団体・65歳以上・障害者手帳をお持ちの方とそ
の介添えの方は2割引、毎月第2曜日は小中高生まで無料

〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2

TEL:03-3995-0820

HOME PAGE: <http://www.chihiro.or.jp/>

●大島町絵本館

絵本原画展

《開館5周年記念 絵本通信原画展》1999.7.31～8.29

《中村まさあき絵本原画展》1999.9.1～9.29

《佐野洋子絵本原画展》1999.10.1～10.28

《川津祐介絵本原画展》1999.10.30～11.28

《関口ココ絵本原画展》1999.12.1～2000.1.27

企画展

《片桐康一作品展》1999.9.1～9.15

《如是庵絵ことば展》1999.9.16～9.29

《金子隆亮イラストレーション》1999.10.1～10.15

《宮原和香日本画展》1999.10.16～10.28

《表 安子パステル画展》1999.10.30～11.14

《尾山章木版画展》1999.11.16～11.28

《第6回全国手づくり絵本コンクール入賞者絵本展》

1999.12.1～12.26

《年賀状展》2000.1.5～1.16

事業計画

- ・ 会館5周年記念式典 1999.8.23
入館料無料開放、アトラクション「琵琶語り」
- ・ 山本薫 ヴァイオリンコンサート 1999.8.29
- ・ 絵本トーク「シャンソンにのせて」出演：戸川昌子ほか
1999.9.18 14:00～、18:30～
- ・ 大島絵本会議「絵本の中の生と死」出演：川津祐介ほか
1999.10.30
- ・ 劇団碧鳥公演「10万回生きたねこ」出演：劇団碧鳥
1999.11.14
- ・ 絵本のフリーマーケット
1999.11.20～21
- ・ 手づくり絵本コンクール表彰式
1999.12.11

【開館】10:00～18:00

【休館日】月曜日（祝日の場合は翌日）月一回整理日

【入館料】大人 500円・中高生 300円・小学生 500円

〒939-0283 富山県射水郡大島町鳥取50

TEL:03-3995-0820

●軽井沢絵本の森美術館

《妖精絵本展》

1999.6.25～10.11

19世紀の妖精画家、リチャード・ドイル、チャールズ・アルタモン
ト・ドイル兄弟の原画作品をはじめ、ウォルター・クレーンやシシ
リー・メアリー・バーカー、アーサー・ラッカムなどの美しい絵本と原
画およそ130展を公開します。また、「特集」といたしまして天野喜
考氏の原画展、そして日本における妖精的存在を古書や絵本を通じ
てご紹介します。

《併設展・世界のイラストレーター展II》

1999.6.25～10.11

アメリカやポーランドなど7カ国のイラストレーターたちによる絵
本原画、36展を展示いたします。またギフトブックと呼ばれる20
世紀初頭に流行した豪華本を集めました。カイ・ニールセンの『太陽
の東、月の西』(1914年初版本)やアーサー・ラッカムの『イソップ
寓話集』(1912年版)など色彩豊かな挿絵の本はひとつの芸術品と言
えます。

A. フラワーフェアリーのいる情景をつくる会

1999.7.31/8.1 14:00～

参加費：200円

B. 森のおはなし会

1999.8.7 11:00～14:00～各30分

参加費：無料

C. こんな妖精、どんな妖精?

1999.8.20/21 14:00～各60分

参加費：無料

D. 妖精ポエムカードをつくる会

1999.8.28/29 14:00～各60分

参加費：無料

【開館】6・10月9:30～17:00 7・8・9月9:30～17:30

【休館日】6/29・10/5

【入館料】絵本の森 大人800円・中高生500円・小学生400円

エルツ 大人400円・中高生300円・小学生200円

共通 大人1000円・中高生700円・小学生500円

〒389-0011 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1

TEL:0267-48-3340

●エルツおもちゃ館博物館(軽井沢)

《エルツ山地、歴史の証人ベルクマン(坑夫)の世界》

1999.6.25～10.11

鉱山を支えたベルクマンは「採掘係」「運搬係」「炭焼き係」など、それ
ぞれ担当の仕事を持っていました。おもちゃのベルクマンも実際の
ベルクマンと同じように、朝の祈りに始まり、様々な作業を繰り返し
ます。当時と同じ制服(階級と作業内容を示すもの)を身にまとい、
松明や掘り当てた鉱物を手にする様子は、何百年も前の鉱山の様子
を生き生きと物語ってくれます。

〒389-0011 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢193-3

TEL:0267-48-3340

●けんぶち絵本の館

《第9回絵本の里大賞》

1999.8.1～31 期間中無休、入館無料

来館された皆さんが選ぶ絵本のコンテストです。

*同時開催

《あべ弘士展らん会～どうぶつたちが見た真夏の夜の夢～》

鑑賞整理券300円(高校生以下無料)

この会の展示のためにあべ弘士さんが創作して下さった立体原画等
もあり、今までとは一味違う原画展です。

《劇団にわか こわーいお話し会》

1999.8.14・15 14:00～15:00 参加無料

《あべ弘士さんと過ごす日「夏・あそび」》

1999.8.21 14:00～16:00 参加無料

《工作教室「石に絵を描こう」》

1999.8.21 14:00～16:00 参加無料

*その他 (8月中)

・紙芝居・創作教室・手づくり絵本・けんぶち焼き体験教室・読み聞か
せ・わくわく絵本タイムなど

・お話し会 毎月第1土曜日14:00～

・堀川真さんの創作教室 毎月第3土曜日14:00～

・工作教室 毎月第4土曜日14:00～

【開館】10:00～17:00

【休館日】期間中無休

〒098-0322 北海道上川郡剣淵町市街地本町 絵本の館

TEL:016534-2624 情報:011-700-5600

●世田谷文学館

《創刊500号記念「こどものとも」傑作絵本原画展》

1999.6.26～8.15

「おしゃべりなたまごやき」「とらっくとらっくとらっく」「ふしぎなえ」など戦後の絵本を代表する傑作約20点の原画を前期・後期にわけて紹介。

【開館】10:00～18:00

【休館日】月曜日(祝日の場合は翌日)

【入館料】大人300円・大高生200円・小中生100円

65歳以上・障害者150円

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10

TEL:03-5374-9111

●沼田絵本美術館

《子供地球基金・地球さんへの贈り物展》

～子どもたちの絵で地球を塗り替えよう～

1999.7.31～1999.8.29

沼田絵本美術館では世界の子どものための救援活動を行っている子供地球基金KIDS EARTH FUND(国際非営利民間支援団体)の主旨に深く賛同し、微力ながら協力しております。毎年恒例になった夏の期間の企画展を今年も開催いたします。子供地球基金はこれまで日本国内の主要都市を始め、フランス・パリのポンピドー・センター、スイス・ガット本部、ロシア・プシキン美術館、アメリカ・ボストンのワールドトレードセンターなど各国で子供たちの絵画展を開催してきました。今年もアジア、アメリカ、ヨーロッパなど世界各国の子供たちが思い思いに描いた約50点ほどの絵画を展示いたします。

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀1-25-20

TEL:03-3708-8200

《世界の絵本原画展》

1999.9.4～1999.11.28

沼田絵本美術館所蔵の各国絵本の原画の展示。

夏の暑さが過ぎた秋の静かな時間の中で、ユニークな作家の作品、芸術的なセンスのもの、心が休まるようなデッサン、様々な絵本の原画を見る醍醐味をゆっくりと味わって下さい。

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀1-25-20

TEL:03-3708-8200

●飛騨絵本美術館ポレポレハウス

第1展示室

《田島征三 展画展》

1999.6.1～8.31

「こやぎがやってきた」「とべバツタ」

1999.1～

「しずかのけっこん」

第2展示室

《色鉛筆画家 ミツル・カメラアーノ特別展》

1999.9.1～

作品は、スペインやイタリアの陽気さを思わせる明るさがあふれている。赤・黄・青など何色もの色を重ねて、奥行きや変化、光や影を作っていく。そのイメージを発揮させるのが色鉛筆なのだ。

「見たままを素直に描いたら、野菜ってこんなにキレイなんやなくて。そのうち模様が宇宙のように見えてきて。絵を描きながら旅をしている気分にもなれるんよ。」

・ミツル・カメラアーノ 色鉛筆画ワークショップ9月に開催予定

・おおまきちまき ジョイントコンサート計画中!

催し物

・池田千鶴子ハーブコンサート 1999.9.24

【開館】10:00～17:00(入館は16:30まで)

【休館日】木曜日(8月は無休)

【入館料】大人700円(高校生以上)・小人300円(4歳以下無料)

〒506-0241 岐阜県大野郡清見村夏厩713-23

TEL:0577-67-3347

●板橋区立美術館

《'99 イタリア・ポローニャ国際絵本原画展》

会期:1999年7月10日～8月22日

毎年恒例の絵本原画コンクール入選作品による展示。総点数500点程度。会期中幼児とその保護者、イラストレーター志望の方々を対象にワークショップもある。

【開館】9:30～17:00(16:30まで受付)

【休館日】月曜日(祝日の場合翌日)

【入館料】大人500円・大高生300円・小中生100円

〒175-0092 東京都板橋区赤塚5-34-27

TEL:03-3979-3251

●イルフ童画館

《ハンプティ・ダンプティ展》

1999.7.30～10.6

アン・ヘリングぶん・武井武雄え

イギリスやアメリカのわらべうたにそえられた武井の独自の挿絵。かつて小学館から発行された絵本の貴重な原画53点を一堂に展示。

《モーリス・センダック原画展》

1999.5.28～10.27

子どもから大人まで多くの人々を魅了し続けるセンダックの原画22点をはじめとする作品展。日本ではここでしか見ることができない貴重な原画をごゆっくりお楽しみ下さい。ミュージアムショップにてオリジナルグッズを多数販売中!

《大沢コレクション展》

1999.10.29～2000.1.26

武井武雄と深い交流のあった埼玉の歯科医大沢三武郎氏の秘蔵コレクション10点ををの思い出エピソードとともに一挙展示。

《絵雑誌展》

1999.5.28～2000.1.26

第1期・2期・3期(約2ヶ月半ずつ)

《武井武雄原画展》

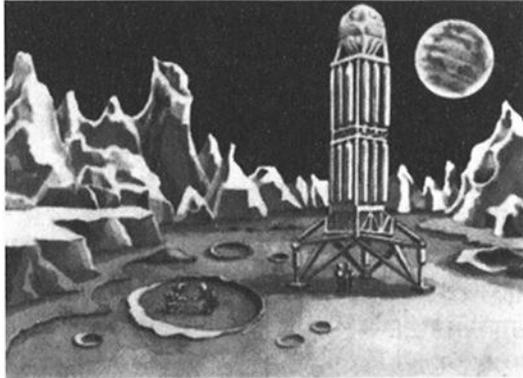
1999.10.8～2000.3.20

武井武雄の幅広い年代の童画作品原画展。タブロー画と呼ばれる童画絵画から絵雑誌の挿絵に使われた原画まで魅力溢れる武井の世界をお楽しみください。

〒394-0027 長野県岡谷市中央町2丁目2番1号

TEL:0266-24-3319

HOME PAGE: <http://www.city.okaya.nagano.jp/ilif>



キダーブック原画「月で遊ぶ」

●いわむらかずお絵本の丘美術館

トガリ山のぼうけん 完結記念展《トガリ山のなかまたち》

1999.7.1～10.3

1991年にはじまった長編絵本『トガリ山のぼうけん』シリーズは、1998年刊行の8巻でついに完結。完結記念展では、シリーズが生まれるまでのエピソード、絵本づくりのこと、登場する生きものたちのこと、トガリ山に見る作者の自然観などに迫る。絵本原画は、『トガリ山のぼうけん』のほか「14ひきシリーズ」「こりす」「かんがえるカエルくん」などの代表作も展示。

《いわむらかずお朗読とおはなし会・サイン会》

1999.8.1・15・28、9.11・26、10.10、11.3・21、12.12
予約不要

おはなし会 サイン会 14:30～

連載中! 月刊クーヨン/クレヨンハウス「新・えほんの丘日記」
1999年4月号より

【開館】10:00～17:00(金曜日は19:00まで、入館は閉館の30分前まで)

【休館日】月曜日(祝日開館、翌日休館)、展示替えのための臨時休館
3/15～17、6/28～30

【入場料】大人900円・中 生700円・小学生500円・幼児300円
30名以上10%割引(要予約)

〒524-0611 栃木県那須郡馬頭町大字小砂3097

TEL:0287-92-5514

●大阪国際児童文学館

《ケストナー生誕100年記念展》

1999.9.2～10.30

「エーメールと探偵たち」「ふたりのロッチェ」などで知られるドイツの作家ケストナーの業績を紹介し原書の全てと邦訳作品を展示します。

*特別講演会

《ケストナー生誕100年記念講演会》

1999.9.12 13:30～16:00

講師:今江祥智(作家)「私のケストナー」

上野陽子(当館専門員)「ケストナー 人と作品」

参加費:1000円

場所:当館講堂

定員:150名

申込方法:FAX又は当館カウンターに直接

申込開始日は8.12～

《こども室行事》

・おはなし会「なぞときのおはなし」

1999.9.11 15:00～15:30

・ワークショップ「おはなしであそぼう」

1999.9.11 14:00～15:00

・千里YWCAおはなし会「ねずみじょうど」ほか

1999.9.26 14:00～14:30

・コスモスフェスタ「ことばあそび大会」

1999.10.10 14:00～15:00

・おはなし会「空のおはなし」(空にまつわるおはなしや絵本を楽しむ)

1999.10.17 14:00～14:30

・おはなしと太鼓演奏

「バオバブの木の下で -西アフリカの昔話-」

1999.10.24 14:30～15:30

場所:当館講堂

定員:100名(先着順、おとなと子ども)

〒565-0826 大阪府吹田市千里万博公園10-6

大阪府立国際児童文学館内 財団法人大阪国際児童文学館

TEL:06-6876-8800

HOME PAGE: <http://www.ksi.ne.jp/iiclo/>

●絵本の樹美術館

《赤ずきんちゃんとあそびましょ》

おはなしの世界へようこそー布の素材でハンズ・オン!ー

1999.7.10～9.26

今回の企画は物語の世界を布を素材に三次元的に展開するものです。耳で聞いたり、絵として見たりしているものを具体的に立体的に表現します。布の持つ優しさは安心感を、変化する面白さは好奇心を、一時物語の登場人物となる時間と空間は、自己肯定感を子どもたちに贈ることになると確信します。

*ハンズ・オン

欧米のチルドレンズミュージアム(子供対象のミュージアム)で展開されている、参加者が直接触ったり、関わったりして、楽しみながら学べる参加体験型の展示方法。

*対象：幼児～大人

*内容：1. 赤ずきんちゃんのおはなしをあそぶ(制作 野口光世)
2. 資料の展示「赤ずきん」のお話をたどるためにー
3. お話の時間 グリムのお話

【開 館】10:00～17:00

【休館日】水・木曜日(冬期閉館)

祭日・3月・8月無休

【入館料】大人600円・3才～中学生300円

※団体10名以上 大人550円・3才～中学生250円

〒409-1501 山梨県北巨摩郡大泉村西井出字石堂8240-4579

TEL & FAX:0551-38-0918

東京事務所(びすたーり内)

TEL & FAX:03-3439-9675

●黒姫童話館

《ミヒヤエル・エンデ特別展》～広がりゆく「モモ」の世界～

1999.3.20～9.27

今回の特別展では、手書き草稿、自筆の挿絵など「モモ」誕生の原資料をはじめ、オペラや演劇の上演記録からカメのコレクションに至るまで、「モモ」に関するあらゆる資料を集めてみました。

〒389-1303 長野県水内郡信濃町野尻黒姫高原3807-30

TEL:026-255-2250

●ぐんまこどもの国児童会館

《夏休み特別企画 コマガタワールド～「見る」から「見つける」へ～

1999.8.7～8.29 (8.9・16・23の3日間は休館)

場所：ぐんまこどもの国児童会館 2階他目的ホール

創作絵本「BLACK & WHITE～しろとくろ」が大きなスクリーンになって会場に展示されるのをはじめ「リトルアイ」シリーズから「ONE FOR MANY～ひとつがたくさん」「WALK & LOOK～あっちとこっち」の大型絵本など、グラフィックデザイナー駒形克己さんの創造的な絵本の世界のすべてを紹介し、また、駒形克己さんがデザインした布の絵本や、形を組み合わせ遊ぼうクッション。顔を作って遊ぶブロックの「遊具の体験コーナー」などもあります。

1. ワークショップ

・1999.8.19～8.29「くるりと変化」

カードの表と裏の変化をつくり出すプログラム。カードを裏返したときの思いがけない展開や動きで遊びます。

2. 制作コーナー

・1999.8.19～8.29「かおのカード」

期間中毎日実施で9:30～17:00(材料配布は16:30)まで。どなたでも参加できます。

3. 駒形克己氏特別ワークショップ

・1999.8.29

10:00～12:30 じゃばらカード(親子30組)

13:00～17:00 家族の絵本～おおきさくらべ～(家族20組)

※特別ワークショップは、いずれも事前申込みになります。

【開 館】9:30～17:00

〒373-0054 群馬県太田市長手町480番地

TEL:0276-25-0055

●四季の森 絵本美術館

《しかけ絵本の世界展》

1999.7.20～9.6

【休館日】火曜日

【入館料】一般500円・小学生300円

〒378 群馬県沼田市玉原高原口 TEL:0278-23-9080

●竹久夢二伊香保記念館

《夢二のスケッチ展》

1999.8.10～10.20

関東大震災後の東京の様子を描いた「震災スケッチ」を中心に夢二のスケッチを展示。

《夢二・花鳥春秋展》

1999.6.1～11.20

夢二がデザインした半襟、浴衣・手拭・団扇などの季節感あふれる夢二の作品を展示。

《幻の西洋人形と大正の食器展》

1999.7.1～12.10

「モリムラドール」「オールドノリタケ」「ガラス食器」などを展示。

・サロンコンサート

出演：ハーブ奏者 富田慧子

日時：1999.9.23

場所：夢二黒船館 夢二ホール

定員：80名

※詳細はお問い合わせ下さい。

【開 館】8:00～18:00

【休館日】年中無休

【入館料】・本館新館共通券(音のテーマ館券付)

大人1500円・小人1200円

※団体20名以上 大人1300円・小人1000円

・予約制特別コースA 大人3000円

・予約制特別コースB 大人5000円

〒377-0102 群馬県北群馬郡伊香保町544-119

TEL:0279-72-4788

●小さな絵本美術館

八ヶ岳館

《今村光彦 写真展～大自然と小さな生命の旅～》

1999.7.16～9.19

《ハンス・フィッシャー展》

1999.9.23～12.5

【開館】10:00～17:00(16:30まで受付)

【休館日】火曜日(祝日の場合は翌日)

【入館料】大人700円・中高生400円・小学生300円

※団体15名以上 大人600円・中高生350円・小学生250円

〒394-0011 長野県岡谷市長地989-5

TEL:0266-28-9877

●ブライアン・ワイルドスミス美術館

企画展

《Bear! Bear! Bear!》

1999.6.3～10.5

ワイルドスミスの描く動物の中でもとりわけ愛らしく、とぼけた表情が人気の「クマ」が登場する作品を集めたほのぼのとした展示。

常設展

《石坂浩二のマザーグース》

ワイルドスミスは子どもたちが好む唄を選び、彼独自のマザーグースの世界を作り出した。「日の光がページから降り注ぐような生命力と活気と色彩がある。」と賞賛されているワイルドスミスのマザーグースを館長の石坂浩二が翻訳を手がけ、絵と絶妙なハーモニーを生み出した絵本。邦訳を添えて絵本原画を展示。

出版記念特別展

《ブレーメンのおんがくたい》

1999.6.3～10.5

春出版されたばかりのワイルドスミスの最新作『ブレーメンのおんがくたい』の絵本原画を展示。

【開館】9:00～17:00(最終入館16:30)

【休館日】水曜日(年末年始・祝日は開館)

【入館料】一般700円・小学生500円

〒413-0235 静岡県伊東市大室高原9-101

TEL:0557-51-7330

●絵本美術館&コテージ 森のおうち

《東 逸子の幻想時間》

1999.7.16～9.7

「翼の時間」「月光公園」「アマテラス」絵本原画展

《「魔女がおしえてくれたこと」スズキ・コージ 絵本原画展》

1999.9.10～11.16

「山のディスコ」も同時展示

《高野玲子の「ねこ・ネコ・猫」展》

1999.11.9～猫にまつわる原画を展示

〒399-8301 長野県南安曇郡穂高町有明2215-9

TEL:0263-83-5670

●斑尾高原絵本美術館

《夏の特別企画展 原田治展/オサムグッズヒストリー》

1999.7.1～10.4

1970年、女性雑誌でイラストレーションを発表して以来、多くの作品を手がけ、若い女性を中心に圧倒的な人気を集めているイラストレーター、原田治。原田治の作品は『ミスター・ドーナツ』のプレミアムグッズのイラストでも知られているように、そのキュートで愛くるしい元気な子どもたちの絵は、子供から大人まで実に幅広い層の人々に愛され支持されています。20年以上に渡って第一線で活躍している原田治のこれまでの創作活動を公開し、その作品の魅力を紹介します。

© Osamu Harada/Koji Honpo

【開館】9:30～18:00

【休館日】火曜日(祝日の場合翌日)

【入館料】700円(飲物付)・子ども300円(町内200円)・幼児無料

〒389-2257 長野県飯山市斑尾高原11492-224

TEL & FAX:0269-64-2807

●竹久夢二美術館

《竹久夢二「楽譜デザインと音楽の表現」展》

1999.7.1～1999.9.26

竹久夢二は、大正時代を中心に数多くの楽譜デザインを手がけました。夢二が活躍したころの音楽会は、流行歌の浸透・蓄音機やレコードの普及・「浅草オペラ」人気などが注目されますが、楽譜が相次いで出版された事実も見逃せません。そして当時もっとも多くの発行部数を誇り、古今東西の名曲を紹介したのが「セノオ楽譜」でした。夢二はこのシリーズの表紙の大部分を担当、それ以外にも多くの楽譜デザインに携わりました。夢二の楽譜デザインは、アール・ヌーヴォーに見られる西欧の装飾様式や、浮世絵を思わせるような夢二式美人画を中心に展開されました。その他にも幅広い作風で、音楽を視覚面から多彩に表現していきました。また音楽関連の夢二の仕事には、「宵待草」に代表される作詞や、童謡・民謡の紹介、さらに音楽書籍の装幀などが挙げられます。本企画展では、これまで余り知られていない、夢二と音楽の関わりに着目し、楽譜デザイン作品をはじめとして、モダンな表現を試みた夢二の音楽世界を紹介していきます。夢二カフェ 港や 美術館に隣接するカフェ「港や」



秋のしらべ(大正13年)

は、壁に蔦がそよぎ、周囲は草花に囲まれて心安らぐ喫茶室です。また店内にはアンティークな蓄音機や時計が置かれ、夢二の絵とともにレトロな雰囲気を楽しんで頂けます。

【開館】10:00～17:00(入館は16:30まで)

【休館日】月曜日(祝日開館、翌日休館)

【入館料】一般 700円・大高生600円・中小生400円
(隣接の弥生美術館と共通)※立原道造記念館も観賞できる
三館共通券(1000円)有

【交通】地下鉄千代田線 根津駅下車徒歩7分・地下鉄南北線
東大前駅下車徒歩7分・JR上野駅公園口より徒歩20分
東京大学弥生門斜め前※館の入り口は竹久夢二館と共通
〒113-0032 東京都文京区弥生 2-4-2
TEL:03-5689-0462

●ペイネ美術館

《レイモン・ペイネ追悼展～永遠の恋人達》

1999.7.24～9.24

本年1月に90歳で亡くなったレイモン・ペイネの追悼展。当館のために描き下ろした100号の作品「世界の愛と平和」や、原画作品、版画作品など新資料も含め約80点を展示。ペイネの画業をたどる。

【開館】9:00～17:00

(入館は16:30まで)

【休館日】会期中無休

【入館料】大人900円・中

小生500円

〒389-0111

長野県北左久郡軽井沢町塩

沢湖217

塩沢湖レイクランド内

TEL:0267-46-6161



© ADAGP/PARIS・SPDA/TOKYO 1999

●弥生美術館

《伊藤 彦造 展》～未公開原画を中心に～

1999.7.1～1999.9.26

伊藤彦造は昭和初年代から20年代にかけて少年雑誌を中心に活躍した挿し絵画家です。彦造は剣戟画面の迫力や構図の奇抜さに、特異な才能を発揮しました。さらに彼が描く凄絶なまでの少年美/日は、青年美は多くの熱狂的なファンを魅了しました。本展では、日本の美少年、美青年絵画の歴史を辿るコーナーを設置し、その中で彦造の存在意義を再確認していきます。

【開館】10:00～17:00(入館は16:30まで)

【休館日】月曜日

【入館料】一般700円・大高生600円・中小生400円

(隣接の竹久夢二美術館と共通)※立原道造記念館も観賞できる
三館共通券(1000円)有

〒113-0032 東京都文京区弥生 2-4-2

TEL:03-5689-0462

◆「絵本学会 NEWS」記者募集のお知らせ

「絵本学会 NEWS」の取材記者を募集いたします。

あなたの住んでいる地域の読み聞かせサークルや家庭文庫、勉強会などを取材して、NEWSで紹介してください。また、絵本作家の仕事場探訪・インタビューなども、いずれ企画する予定です。会員の皆様の参加を心よりお待ちしております。我こそはと思う方は、どうぞお気軽に、事務局までご一報ください。

◆あなたの活動を教えてください！

NEWSに掲載するための情報をご提供ください。ご自身の活動はもちろん、お子様が通っている幼稚園・保育園の学校や幼稚園・保育園の学校、図書館・美術館など、あなたが参加されている活動なら何でも結構です。たくさんの情報をお待ちしております。

◆【伝言板】&【会員の声】コーナー開設！

【伝言板】…絵本に関する情報交換のコーナー。「こんな絵本を探しているんだけど…」「この絵本の出版社を教えてください」「サークル会員募集」など、知りたい情報、知っている情報をお寄せください。

【会員の声】…絵本について思うこと、絵本や絵本展覧会の感想、また絵本学会(NEWSも含む)に対するご意見・ご感想など、あなたの声をお聞かせください。

●投稿方法：FAXまたは郵便で、氏名(ペンネームも可)・住所を明記して、事務局までお気軽にご投稿ください。

絵本学会事務局 〒187-8505 武蔵野美術大学内(住所不要)

TEL:042-342-6091 FAX:042-342-5173

事務局からのお知らせ

●絵本学会研究紀要「絵本学」第2号論文公募再度のお知らせ

1999年度第2号の論文を公募しております。下記の要領でふるってご投稿ください。

研究論文集投稿要領

1. 投稿者の資格：絵本学会会員および準会員
2. 掲載の対象：絵本に関する研究論文、調査研究、研究ノートで、未発表のもの。
3. 掲載者の決定：受理した論文は、査読の上編集委員会が掲載の採否を決定する。
4. 刊行までの日程：(1)原稿提出受付期間は、1999年9月30日(必着)とする。(2)掲載の採否は、編集委員会の議を経て11月末日までに決定し通知する。(3)刊行は、1999年度内とする。

執筆要領

1. 日本語による横書きとする。
2. 原稿枚数は、1論文あたり400字詰め原稿用紙で20枚から40枚までとする。
3. 原則としてワープロ原稿とし、表紙に原稿の種類(研究論文、調査研究、研究ノート)、論文タイトル(和文、英文)、執筆者名(ローマ字を併記)、所属機関、専門分野を明記する。
4. 執筆にあたっては、「執筆要領」に基づいて作成する。「執筆要領」は、事務局に請求すること。
5. ワープロ原稿には、フロッピーディスクを必ず添付すること。

データは、MS-DOSまたはマッキントッシュデータ。

6. 図版はモノクロを原則とする。カラー図版を希望する場合は、自己負担とする。

7. 論文掲載者には、掲載誌5部と抜き刷り30部を無料で呈する。

原稿提出先

原稿は絵本学会事務局宛に郵送すること(FAXによる送付は不可)。

●理事会・運営委員会

5月15日 運営委員会 於：武蔵野美術大学吉祥寺校

議題

- ・絵本学会会長交代について
- ・第2回絵本学会大会について
- ・1998年度活動報告について
- ・1998年度決算報告について
- ・1999年度活動計画案について
- ・1999年度予算案について

6月19日 運営委員会 於：大島町絵本館

議題

- ・第2回絵本学会大会進行について確認

7月24日 運営委員会 於：武蔵野美術大学吉祥寺校

議題

- ・第2回絵本学会大会報告について
- ・研究紀要『絵本学』について
- ・『絵本学会ニュース』について
- ・次回絵本学会大会について